

タワーマンション立てこもり事件

訪問者

事務員は胡乱な目で、二人の客と、手わたされた名刺とを見くらべた。一人はがっしりした目つきの悪い男。もうひとり、華奢な体つきのわりに頭の鉢ばかり大きな、若い女だった。

「警察の方ですか」

「そうです」

「里中は今、外出しておりますが、どんなご用でしょう」

「いえ、里中先生にはなく、今井さんに用があるのです」

「ですから、どういったご用で？」

「それは、今井さんに直接お話しします」

清水はぶっきらぼうに言った。

事務員はむすっとした顔をして、奥にひっこんでいった。チリチリ頭の、感じの悪い中年女だった。

受付のカウンターはほこりっぽく、物が散乱していた。低い天井は、二本の蛍光灯のうち一本が、切れたままになっていた。窓ガラスにはヒビが入っており、割れ目にそってセロハンテープが貼ってある。聞きしに勝る、貧乏事務所だった。

「ようやく探し当てはしたが」清水はぼつりとつぶやいた。「はたして会ってもらえるかどうか……」

祥子は驚いた。弱気な文句も清水らしくなかったが、彼がひとりごとをもらしたこと自体が意外だった。

清水は無駄口をきかない男だった。祥子は三ヶ月前に配属されたばかりの新人で、捜査のあいだは片時も清水のうしろを離れずにいた。清水自身から、そう命令されたことだった。にもかかわらず、清水は祥子に仕事についてなにひとつ指導せず、かといって叱ることもしない。祥子から話しかけても、ほとんど反応はえってこない。まるで彼女の存在など忘れてしまったかのように、清水はいつも一人で考え、一人で動きまわっていた。祥子はわけもわからぬまま、毎日ただ彼のあとを追いかけて続けるしかなかった。

清水の捜査に臨む姿勢は、ひたむきを超えて、どこか偏執的だった。何かにかりたえられるように没入し、いつも唇をへの字にむすんで、不機嫌そうに眉間にしわをよせている。しかもそのしわは、目を追うごとに深さを増していった。理由は、捜査が彼の思ったように進展しないためであった。

清水のこの苦悩は、同僚たちの共感を得られなかった。表向き、事件はすでに解決していたからだ。容疑者はすでに逮捕され、自供もすんでいた。状況から見て、彼以外の犯行ではありえなかった。

ところが清水ひとりがその結論に納得せず、新人の祥子をひきつれて捜査を続けていた。頑なな態度は上層部の不興を買い、ついに先日、捜査の打ち切りが正式に決定した。清水は黙ってその命令に従った。むろん不本意なはずであったが、彼はひとことも不満を口にしなかった。

その翌日から、清水は休暇をとった。祥子は別の事件の班に編入された。ところが、まる二週間たった今日になり、祥子は清水に呼び出され、有無をいわさずふたたび同行を命じられた。

この間、清水は人捜しをしていたらしかった。その人物は今井という名前だという。「どういう方なんですか」

清水にたずねても、答えてもらえなかった。しかたなしに祥子は、清水とは別の先輩にたずねてみた。

「やつの師匠だよ」清水と同期というその先輩は、なぜか複雑な表情をしてそう教えてくれた。「捜査一課のエースと呼ばれた人だね。まだ新人だった清水に目をかけ、捜査のイロハをたたき込んでくれた、やつにとっては恩人だ」

やってきたのは新宿の雑居ビルにある、ちいさな弁護士事務所だった。今井は五年前に警察をやめ、現在はこの事務所ではたらい回しているということであった。

しかし、建物のみすぼらしさといい、事務員の愛想のなさといい、ここが本当に、元捜査一課エースの再就職先なのだろうか。ここにたどりつくまで二週間かかったというのもの、なにやら不思議な話だった。

やがて、事務員がもどってきた。

「こっちへどうぞ」

今井は、会ってくれるらしい。清水はネクタイをなおし、上着のボタンをしめた。

案内されたのは、窓のないちいさな部屋だった。もとは物置だったらしい狭い室内に、段ボール箱や書類がビルのように積み重なり、その一角に、スチール製のデスクがひとつ置かれている。

そのデスクの向こうに今井はいた。祥子の予想とはまったく異なる風貌だった。分厚い眼鏡をかけ、なで肩の小柄な体で端然と椅子にかけているその姿は、元刑事というより学校の先生といった感じだった。

「お元氣そうで」

清水はにこりともせず、そう言った。

今井は何も言わなかった。清水を見つめるその目は、氷のように冷ややかだった。

「ずいぶん探しました。まさか、こんなところにおられるとは」

「……」

「あの会社は、とっくにお辞めになられていたのですね」

「あの会社とは、どの会社のことですか」

「警備会社です」

「何番目の警備会社ですか」

木で鼻をくくったような敬語に、清水はぎこちない苦笑を浮かべた。

「ここには、いつから？ いったいどんな仕事をしているんですか」

「君には関係ありません」

「調査員のようなお仕事ですか。しかし、こちらの先生は、庶民の味方を標榜しておられる人情弁護士でしょう。ヤミ金の取り立てやDV夫の証拠集め？ 先輩にとっては役不足もはなはだしいと思いますかね」

「君には関係のないことです。それよりも、用件は？」今井は感情のない声で言った。「今

さらこの私に、何の用があるというのですか」
今度は清水が黙り込んだ。

この時、祥子はまだ知らなかった。今井は健康上の問題を理由に警察を依願退職したあと、大手警備会社の顧問になった。ところがそこはすぐにクビになり、そのあとの再就職先も、三ヶ月とたたず次々にクビにされたのだという。ついに今井を雇ってくれる企業がどこにもなくなり、流れ着いた先が、里中という老弁護士事務所だった。里中は昔、ある少年犯罪事件を通じて今井とは裁判で激しく対立した関係にあったが、かつての仇敵の苦境を見かねて拾ってくれたものらしい。

二人は机をはさんで、にらみあっていた。そこへ先ほどの事務員が、お茶をもって現れた。事務員は緊迫した部屋の空気など意にもとめず、乱暴な手つきで湯飲みを三つ、机のうえに置いて、部屋を出て行った。

壁際にパイプ椅子が三つ、畳んでたてかけてあった。清水をそのうちのひとつを取ってくると、断りもなしに机の前に広げ、腰をおろした。今井は何か文句を言いかけたが、あきらめて口をつぐんだ。

「例のタワーマンシヨンの事件。薬物中毒の男に女三人が殺された、あの事件です。先輩もご存じでしょう」

「……報道されているていどのことは、知っています」

「捜査を担当したのは、僕でした」

「そうですね」

「容疑者の男は心神耗弱により責任能力なしとされ、三人も殺しておきながら、起訴猶予処分となりました。それもご存じですね」

「新聞に、そう出ていましたから」

「それは事実ではありません」

清水はきっぱりと言いつつ切った。

「僕はその男を何度も取り調べました。ただのつまらない、ありふれた男です。精神病の病歴はなんかありません。たしかにクスリりの常習者ではありません。しかしあの殺し方は、薬物乱用者の仕業ではありません」

「それなら、なぜ不起訴になったのですか」

「上の決定です。理由は不明です。ただ、想像はつきます。報道にも出ていたように、容疑者の父親は医師です。この父親というのが、じつは幼い頃に他家に養子に入っていますね。生家の方には兄がいるんですが、この二人の兄というのが、警察庁の高級官僚なんです」

つまり、容疑者は警察幹部の甥ということになる。この事実はまだ世間にはもれていなかった。

「たしかに逮捕された時の容疑者は、まともな会話もなりたない状態でした。体内からは、多量の薬物が検出された。だが数回にわたっておこなわれた精神鑑定の結果は、なぜか曖昧さを残した不明瞭なものでした。報告書は何度も読みましたが、そこには簡潔であるはずの結論をくらまそうとする意図が、はっきり感じられました」

「しかし、結果は不起訴となった」

「そうですね。警察は、今も昔も変わりません」

「……なるほどね」はじめて今井の頬がゆるんだ。しかしそれは清水を嘲るような、皮肉な笑みであった。「君がわざわざ私を訪ねてきたわけが、わかりました」

すると清水は、むっと顔色を曇らせて、

「それは誤解です。早合点しないでください。僕はべつに、泣き言を聞いてもらいたいわけじゃありませんよ。まして、あの時のあなたの気持ちが変わりました、なんて言うつもりもない。僕は、あなたとは違うんです」

「そうでしょうか」

「違います。僕は、上の決定にはしたがいます。でも、あの時のあなたは、あくまで捜査の続行にこだわった。秘書の自殺による幕引きでは納得せず、妥協を拒んで命令にさからい、独断でひそかに捜査を続行した」

「そうです。それを君が、上層部に密告した」

「密告ではありません。報告です。しかたがないでしょう。僕は、あなた専属の部下だったわけじゃない。あなたには何度も諫言をしたはずです。聞く耳を持たなかったのは、あなたの方です。あげくのはてに、あなたは捜査打ち切りの腹いせとばかり、自分のつかんだ情報すべてをマスコミにリークしてしまった。やることが目茶苦茶です」

「しかし、おかげで悪徳政治家をひとり、引退させることができました」

「冗談じゃない。その結果はどうになりましたか。部下を置き去りにしてさっきと警察をやらめ、その時はあなたも気分がよかったかもしれない。しかし、あなたを雇ってくれる再就職先は、どこにもなかった。いったんは雇ってくれても、警察を辞めた理由が伝わると、すぐにやめさせられた。当然でしょう。自分の組織をマスコミに売る人間なんて、置いておけるわけがない。最後はどうとう、こんな貧乏事務所に拾われるほど落ちぶれてしまった。一課のエースといわれたあなたが、なんとというザマですか」

清水の言葉は熱をおびていた。声には怒りと恨みがこもっているようだった。祥子はこれほど多弁な清水の姿を、見たことがなかった。

しかし、清水の一方的な熱は、今井には伝わらなかった。

「君はそんな話を蒸し返すために、やってきたのですか。こんなところまで」今井はうんざりした顔になって、大きなため息をついた。「もういちど聞きますが、いったいこの私に何の用があるのですか」

今井の冷淡な態度に、清水は我に返って辞色をあらためた。

「先輩の意見を拝聴したいんです」

「何について？」

「ですから、タワーマンションの事件についてです」

「なぜ？ 君は不起訴を受け入れたのでしょうか」

「そんなことを聞いてもらいたくないんじゃないんです。不起訴だろうが、隠蔽だろうが、もみ消しだろうが、そんなことはどうでもいい。捜査が打ち切られたことを問題にしているわけではありません。事件そのものを問題にしているのです」

清水は一瞬ためらったあと、思い詰めた顔つきでひと息にいった。

「僕にはあの男が犯人だとは、どうしても思えないのです」

タワーマンション殺人事件

四月十九日、日曜日の午前八時。海を望むタワーマンションの二十三階から、女がひとり墜落した。雲ひとつない、快晴の朝であった。

その一部始終を、一〇〇メートル離れた位置から警官が目撃していた。マンションの地上は、レンガ敷きの遊歩スペースになっていた。植栽とベンチがいくつが設置されているだけの、ガランとした空間だった。その広場をはさんだ反対側に、交番があった。この朝は若い巡査がひとり、立番をしていた。

遊歩道にはただひとり、年配の男性が子犬を散歩させていた。その様子をぼんやりながめていた視界の上で、何か動く気配がした。巡査がそちらに目を向けると、マンション高層階のバルコニーの手すりに、人間がひっかかっているのが見えた。

干した布団のように、手すりの外側に上半身が垂れ下がっている。両手はだらりと真下に伸び、髪の毛もすべて逆立って、うなじが丸見えになっていた。黄色い衣服には、赤いまだら模様がついていた。

ふざけているのか、あるいはこれから飛び降り自殺でもしようというのか。人体はびくりとも動かない。

やがて同じ部屋のバルコニーに、もうひとつの人影があらわれた。黒いパーカーのフードをすっぽりかぶり、サングラスにマスクで顔を隠しているのが、巡査からの距離でもはっきり見てとれた。

黒い人影は、身を乗り出して地上をのぞきこんだ。それから手すりの端に、何やらちいさな物体を設置した。これがポータブルのビデオカメラであったことは、のちに判明している。

やがて黒い人影は手すりのむこうに引っ込むと、人体の足をつかんで高々ともちあげた。人体は真つ逆さまに落下した。どすんという鈍い音が、休日の静けさの中に反響した。

巡査はあわてて自転車にまたがり、広場の中央を一直線に突っ切った。その間、彼は視線をバルコニーから離さなかった。黒い人影はカメラを手にとると、ふたたび外に身を乗り出し、自分が突き落とされた人体を撮影していた。しかしすぐに、手すりの奥にひっこみ、そのまま二度と姿を現さなかった。

広場を渡りきると、巡査は自転車を飛び降りた。犬をつれた男性が、尻もつをついて腰を抜かしていた。彼の目の前には血しぶきがひろがっていて、その中央に人間の死体がひとつ、仰向けに倒れていた。手足が奇怪な形に曲がり、頭頂部が割れたスイカのようにはじけている。損傷をまぬかれた顔面はしかし、口角から耳元にかけて鋭利な刃物で切り裂かれていた。見たところ、四十代くらいの女性のようにだった。

その他にも、黄色いワンピースの胸元から腹にかけて、いくつもの刺し傷が口をあけていた。赤い模様に見えたのは、すべて血痕だった。これらの状況から、死体は墜落によって絶命したのではなく、バルコニーから突き落とされた時点ですでに死亡していたことは明らかだった。

物音に驚いたマンションの住人が、あちこちから顔をのぞかせた。このマンションには警備員が常駐している。その警備員も、いったい何事かという顔をして飛び出してきた。

巡査は警備員に、エントランスへ行つて人の出入りを規制するよう指示をした。あの黒い人影を、外に逃がさないための措置だった。非常階段の出口は、巡査から見える位置にあったため、こちらから逃げられる心配はない。

まもなく、無線連絡を受けた警察官が、群がるように集まってきた。さしあたっての陣頭指揮は、所轄署の主任刑事がとることになった。

女が突き落とされた部屋は、二三〇一号室と判明した。その部屋には橋元理子という名の三十代の女が、ひとりで住んでいるということだった。しかし警備員によれば、死体の女は理子とは別人であり、このマンションの住人でもないという。

主任刑事は、二三〇一号室のチャイムを押した。返事はなかった。

巡査と警備員は、階段からもエレベーターからも、人の出入りはなかったと断言した。そのことは、防犯カメラの映像からも確認できた。午前八時以降、エレベーターにも、二十三階の廊下にも、人の姿は映っていないかった。

つまり黒い人影は、まだ二三〇一号室の中にいる。

主任は玄関ドアをノックした。しかし反応はなかった。警備員室から電話もかけてみたが、やはり応答はない。隣室住人の協力を得てバルコニーに通してもらい、仕切り越しに二三〇一号室をのぞきこんでみたが、窓は閉め切られ、カーテンにさえぎられて、室内の様子はいわからなかった。バルコニーの床や手すりは、血まみれの状態だった。墜落した女の血痕である。

主任は同じ階の住人全員を避難させ、二三〇一号室の前後を警官でかためさせた。それから警備員とともに、防犯カメラの映像をさらに調べた。橋元理子は在室しているのか。

黒い人影は何者なのか。二三〇一号室には今現在、何人の人がいるのか。

橋元理子の帰宅は、当日の午前一時の映像で確認ができた。

彼女にはつれがあった。二十代と思われる、よく日焼けした遊び人風の男だった。男は片手で理江子の肩を抱き、もう片方の手に茶色いボストンバッグを下げていた。警備員によると、彼はこのマンションの住人ではないという。

二人はエレベーターを二十三階で降り、そのまま二三〇一号室へと入っていった。

その二時間後の午前三時。黄色いワンピースを着た小太りの女が、エレベーターに乗り込み、二三〇一号室へ入っていった。人相、体型、服装から、彼女から墜落した女であることは疑いの余地がなかった。

さらに一時間後の午前四時。今度はスラリとした背の高い女がエレベーターに乗り込み、二三〇一号室へと入っていった。年齢は二十代後半から三十代。グレーのスーツを着た長身の女だった。

その後、八時までの映像を確認したが、彼らが二三〇一号室から出て行く姿は映し出されていなかった。また念のため、一週間前までの映像を早送りで確認したが、住人である橋元理子以外の人の出入りは認められなかった。

つまり、こういうことになる。

二三〇一号室に今日未明、四人の男女が集まった。そのうちの一人は、顔と胸と腹に傷を負って死亡したうえ、バルコニーから下に突き落とされた。

したがって残りの三人は、まだ部屋の中にいる。

そのころ、インターネットの世界でちょっとした騒ぎがもちあがっていた。

ある動画投稿サイトに、「コジロウ」という名前の常連投稿者がいた。そのアカウントから、この朝一本の動画がアップロードされた。

場所は、どこかのリビングルームだった。カメラはテレビの画面をとらえており、そこにはこの朝の天気予報が映し出されていた。音声が聞こえないのはテレビのボリュームが小さいのではなく、画像の音声がミュートされているためだった。

やがてカメラは一八〇度、回転した。フローリングの床、ガラス製のローテーブル、その向こうのソファには女が二人、並んですわっている。ひとりは黄色いワンピースを、もうひとりは純白のウエディングドレスを着ていた。

二人はいずれも猿ぐつわを噛まされ、手首と足首を拘束されているように見えた。互いに体をよせあい、泣きはらした目をカメラに向けて震えている。

撮影者は彼女たち無視し、窓を開けてバルコニーに出た。爽快な青空の下、さえぎる物のない眺望の向こうに、船舶の行き交う港が見える。手すりを越えて下をのぞくと、レンガ敷きの広場と、その先に交番があった。

カメラは室内に戻り、リビングを素通りして廊下に出た。そこには女がもうひとり、後ろ手に手首と足首を拘束された形で、転がされていた。女は競泳水着を着ており、猿ぐつわも噛まされていた。

カメラの右側から一本の腕がのびてきて、女の髪をつかんだ。黒い袖に、黒い手袋をはめたその腕は、撮影者のものにちがいがなかった。撮影者は女をカメラにとらえたまま、その体を浴室までひきずっていった。

浴室は、浴槽の蛇口がいきおいよく出しつ放しになっていた。あふれ返った水が床の排水口に渦をつくっていた。

撮影者は、いったん女から手を離し、蛇口の水を止め、カメラをバスチェアの上に置いた。画面は、浴槽を真横からとらえるかたちとなった。

撮影者は女を立たせた。比較的小柄な女を仰角に撮影しているため、フレームの中には彼女の横顔もおさまっていた。他の二人と違っておびえた様子はなく、入口の方を挑むようににらみつけている。その方向に、撮影者がいるのだろう。

その方向から画面に黒い手がのび、何かの瓶で女の頭を正面から殴った。女の体はうしろに倒れ、背中から浴槽の中に落ちた。はげしい水しぶきがあがり、大量の水が浴槽の外にあふれ出た。

浴槽からは、女の足が突き出していた。膝をびたりとそろえた二本の足は、力なくモゾモゾと宙を蹴っていたが、間もなくその弱々しい抵抗もやみ、折りたたまれるようにして浴槽の中に沈んでいった。

カメラはそのまま、浴槽からのぞく女の足首だけを映し続けた。そして五分後、映像はぶつりと切れた。

この映像が投稿サイトにアップロードされた時刻は、午前七時二十五分だった。冒頭に映っていたテレビの天気予報は、まちがいないその日のものだから、つまりここに映し出されているのは、たったいま起きたばかりの出来事ということになる。手のこんだイタズラという可能性もあったが、そう思わなかった閲覧者の何人かが、一一〇番通報をした。

また別のユーザーたちは、誰に頼まれたわけでもなく、撮影された場所の特定をはじめ

ていた。彼らはチャットを使って意見交換をしながら、画面に映っていた港の風景と角度、レンガ道や交番などから、あっという間にピンポイントで絞り込んでしまった。

それは、橋元理子の住むタワーマンションだった。

この情報は、二三〇一号室の前で手をつかねている捜査主任にも、連絡された。

ただちにインターネットの映像を確認すると、水着の女が橋元理子であることを、警備員が認めた。

部屋の中にいるのは四人のうち、一人は水中に沈められ、もうひとりにはバルコニーから突き落とされた。残りは二人。そのうち一人は殺人者であるらしい。事態は切迫している。

部屋からは依然として、呼びかけに対する応答がない。午前九時。捜査主任は二三〇一号室に踏み込むことを決断した。ところがその準備を進めている間に、マンションの火災警報器が作動した。火元は二三〇一号室だった。

警報のサイレンと、避難を呼びかける人工音声が、全館に響きわたった。もはや躊躇はゆるされなかった。合鍵で玄関ドアを開き、チェーンロックを専用カッターで切断する。同時に、隣室で待機していた一隊が手すりを越えてバルコニーに飛び込み、窓ガラスを割って突入した。

室内は、煙が充満していた。燃烧物は、部屋の中央にあるようだった。隊員は隣室から持ち込んだ消火器で火を消した。

やがて煙が窓の外に排出されるにつれ、部屋の様子がわかってきた。

『コジロウ』の動画とまったく同一のレイアウト。床は血まみれで、ガラステーブルの上に鎮火した燃烧物が横たわっている。それは、胴体をくの字に曲げた人体であった。

すでに黒焦げの状態で、人相はおろか、男女の区別もすぐにはつかなかったが、燃え残った衣装の断片には、おそらくウエディングドレスのものであろう、白いレースのフリルが認められた。

リビングの隅に、膝をかかえてすわっている人物がいた。黒いパーカーのフードを目深にかぶり、サングラスとマスクをして、黒い手袋をはめていた。パーカーは、胸元と袖にべっとり血がついていた。

警官はフードとサングラスをむしり取った。中から現れたのは、橋元理子といっしょにエレベーターを降りた、あの男であった。

男は虚ろな目をしていた。紙のように白い顔をして、涙と鼻水とよだれをたらし、ニヤニヤ笑いながら震えている。

男のかたわらには、様々な物が散らかっていた。血のついた刃渡り十センチのナイフ。わずかにガソリンの入った2リットルのペットボトル。ポータブルのビデオカメラ。電源の入ったノートパソコン……。

パソコンの画面には、動画投稿サイトのページが表示されていた。ログインアカウント名は、『コジロウ』だった。

一方、玄関から突入した一隊は、浴室に直行した。浴槽には、水着を来た橋元理子が水の中に沈んでいた。胎児のように体をまるめた理子は、すこし開いた膝の隙間から、充血した目でじっと天井を凝視していた。

被害者と加害者

橋元理子は三十三才。出身は石川県。職業は銀座高級クラブのホステスだった。マンションは理子自身の名義で、二年前からひとり暮らししていた。両親はすでになくなっており、近しい肉親はひとりもない。以前は年配の男が足繁く出入りしていたが最近姿を見ない、というのが警備員の証言であった。

理子の死因は溺死だった。その他、左の額におおきな瘤ができていた。浴槽に落ちる前に殴られた痕にちがいがなく、凶器と見られる料理酒の空き瓶が、脱衣所の床にころがっていた。また検視の結果として、理子は死亡前数時間以内に、男性と性交渉を持っていたことが判明していた。

黄色いワンピースの女は、名を津田美和子といった。外見は老けて見えたが、じっさいの年齢は二十八才で、千葉県内の信用金庫の職員だった。橋元理子同様、両親も姉妹兄弟もなく、職場近くのアパートに一人住みだった。

美和子の体には、胸部と腹部に刺し傷が七カ所。そのうち致命傷は、肋骨の隙間から心臓を貫いた一撃だった。ベランダから放り出された時には、すでに絶命していたものと考えられる。ただ両頬を切り裂いた傷は、美和子の息のあるうちにつけられたものだった。

ウエディングドレスを着たまま焼死していた女は、掛井真理といった。三十二才の山梨県にある農家の娘で、父親は県会議員をつとめる地元の名士だった。

真理の体は、病的なほど痩せ細っていたものの、火傷以外の外傷はなかった。頭からガソリンをかけられ、生きたまま火をつけられたらしい。死体がガラステーブルの上から床に転落しなかったのは、手足の拘束によって激しく暴れることができなかったためか、あるいは火をつけられたショックで失神状態に陥っていたため、と結論づけられた。直接の死因は、気道に火傷を負ったことによる窒息死だった。

なお、津田美和子と掛井真理の体からは、死亡前の性交渉の痕跡は認められていない。黒いパーカーを着た男は、その場で現行犯逮捕された。

記者会見では、男の氏名は公表されなかった。その理由を警察は、精神障害の疑いがあるため、と説明した。男は拘留された翌日に警察病院に移送され、そのまま入院した。

男の素性は、後日、週刊誌が特ダネとして掲載を強行した。速水進次、二十七才。港区の高級マンションに独り暮らしをする、無職の男だった。

速水の自宅からは一・五グラムの覚醒剤が、使用済みのパイプとともに発見されている。そのほかにも様々な違法ドラッグが見つかっており、逮捕直後の尿検査でも、薬物が検出されていた。

パーカーのポケットからは、百円ライターが発見されている。完全電化の二三〇一号室には火の気はまったくなかったため、掛井真理の体に火をつけたのがこのライターであることに、疑いの余地はなかった。

現場から発見されたナイフは事件前日、速水自身が御徒町の刃物店で購入した物で、刃に付着していた血液は、津田美和子のものであった。

また、ポータブルカメラとノートパソコンも、速水自身の物だった。防犯カメラに写っていたポストンバッグは、空の状態で寝室から発見されている。おそらくはこの中にカメラとパソコンを入れて、持ち込んだのだろう。あるいは理子が身につけていた水着、掛井

真理が来ていたウエディングドレスも、この中にあったのかもしれない。掛井真理のグレーのスーツは、寝室のベッドの上に脱ぎすてられていた。

寝室からは他に、ドラッグが入っていたと思われるプラスチック製のシートと、速水の携帯電話が発見されている。携帯電話には理子の連絡先が登録されており、この一ヶ月のあいだに五十回を超える通話記録が残されていた。その大半が、速水の方からかけた電話であった。なお、理子が死亡する直前に性交渉をもった相手は、速水であった。

速水の素性を明らかにした週刊誌の記事に拠れば、彼はエリート一家の落ちこぼれだった。父親は三つの病院を経営し、母親は国立大学の教授、兄と妹はどちらも一流企業に勤めている。デキの悪かった次男の進次は二流どころの大学を中退したあと、両親からの仕送りで遊び暮らしていた。映画監督になるという夢を持ち、自宅の本棚にはその類いの本も何冊もあったが、真剣に勉強をしている様子はなかった。夜な夜な繁華街に繰り出し、派手に金を使って遊び暮らす毎日だった。

『コジロウ』は、速水が三年前に作ったアカウントだった。

速水はこれまでに何度も、このサイトに動画を投稿していた。内容はどれもたあいのない物で、視聴者数はすべて合わせても三桁にとどいていない。外国旅行先の風景や、高級レストランの料理の映像。洋酒に関する薄い蘊蓄を得意げに語り、どこかで聞いたようなありふれた映画論をぶつ。そこからは軽薄な人格と、強い自己顕示欲はうかがえるものの、残虐な内容のものは皆無だった。

現場にあったカメラのメモリには、動画ファイルが五つ保存されていた。

まず、先月の日付のファイルが二つ。いずれも速見自身が名作映画の感想を述べているだけの動画で、この二本はすでに『コジロウ』のアカウントで投稿済みのものだった。

三本目の動画は、事件の朝投稿された橋元理子の動画である。ファイルの日時は、事件当日の午前七時十分。撮影直後に未編集のまま、現場にあったノートパソコンを使ってアップロードされており、パソコン側にもそのような履歴が残されていた。

四本目と五本目は、それよりあとに撮影された映像であった。

四本目は、ファイルの日時が午前八時〇五分。二三〇一号室バルコニーの手すりの上に設置されたカメラからの映像だった。

手すりには、黄色いワンピースを着た女が、腹を境にして二つおりにひっかかっている。バルコニーには黒いパーカーの人影。その人影が女の足をつかみ、手すりより高く持ち上げる。女の体はバルコニーの外にかき消える。次の瞬間、黒いパーカーは、手袋をはめた手をカメラにのばす。つかんだカメラを手すりの外に突き出し、地上のレンガ道を撮る。そこには墜落した女の死体と、屍もちをついた男性の姿が映し出される。そこで映像は終わっていた。音声は録音されていなかった。

五本目の日時は、午前九時二十一分。内容は、床に置かれたカメラから撮影された、リビングの様子だった。やはり音声は録音されていない。

ガラステーブルの上に、ウエディングドレスを着た女が体をまるめて横たわっている。フレームの左から、黒い腕が一本のびて出る。その手はライターを使って、女の体に火を放つ。たちまちドレスは燃え上がり、部屋中に黒煙がひろがる。

しばらくして画面左に割れたガラスが飛び散り、警察官がおおぜいなだれ込んできて、消火器で火を消しとめる。黒煙が窓の外に排出され室内の見通しがきくようになると、警

官のひとりがカメラに気がつき、手をのばし、おそらくスイッチを切ったのだろう、映像はそこで切れていた。午前九時二十一分というファイルのタイムスタンプは、この瞬間の時刻をさしている。

四本目と五本目の映像は、その存在は報じられてはいたものの、内容自体は非公開とされてきた。清水はその映像を、持参したノートパソコンで今井に見せた。

今井は前かがみになって、目を凝らして画面を見つめていた。しかし動画の再生が終わるとすぐに冷ややかな目にもどり、椅子の背もたれによりかかって、清水を見た。

「橋元理子が速見と知り合ったのは、三月十五日、事件の一ヶ月前でした。速見の行きつけのバーの店員の証言です。その日、独りで来店していた女性客に、速見の方から声をかけた。しばらく二人で飲んでいたが、意気投合したらしく、やがて二人で店を出て行った。この女性というのが、橋元理子でした。橋元理子は、この日が初来店だったのでないかということですよ。それ以降、二人は何度かこの店をおとずれています。事件前日の夜。二人は速水の知人が経営するレストランで、午後八時から午前〇時三十分まで、個室ですごしていました。それからタクシーに乗って、理子のマンションへ向かっています。レストランの店員によれば、速見は店に着いた時からポストンバッグを持っていたということです。橋元理子は銀座にある『ロンド』という高級クラブに勤めていましたが、この日は店を休んでいました」

清水は言葉をお切って、今井の反応をうかがった。今井が何か質問してくれるのを待っているようだった。

しかし、今井は黙ったままにいる。

清水は話を続けた。

「事件の前日、津田美和子は上野、掛井真理は新宿のビジネスホテルに一泊しています。金曜日に電話で予約をし、チェックインはどちらも土曜日の夕方でした。二人はそれぞれタクシーを使って、まっすぐ橋元理子のマンションに向かっています。ホテルはチェックアウトしておらず、荷物も部屋に置いたままでした。荷物といっても、どちらもハンドバッグがひとつあっただけです。三人の女たちの関係は、わからずじまいでした。あるいは事件の夜まで面識がなかった可能性もあります。美和子と真理の携帯電話は、それぞれ二二〇一号室の寝室から発見されており、理子の携帯電話も寝室の充電器に差し込まれました。そのいずれにも、互いの番号は登録されていません。ただ、美和子と真理の携帯には、速水と連絡をかわしたことを示す履歴がのこっていました。事件の五日前を最初に、速水の方から三回ずつ電話をかけています」

ここでまた清水は話を止め、今井の反応を待った。これだけ詳しい話を聞けば、元刑事として、何かしら感ずるところがあるはずであった。

しかし、今井は無表情をくずさない。清水はさすがに肩を落とした。かつての裏切りを思えば、今井の怒りが容易に解けるとは思っていなかったであろう。しかしここまで頑なに心を閉ざされているとは、予想外のようだった。

見かねた祥子は、つい口をはさんだ。はさまずにはいられなかった。

「容疑者の速水は、津田美和子と掛井真理のことは知らないとい供述しているんです」

今井は祥子の顔を見た。突然しゃべりはじめた祥子を見て、はじめて彼女の存在に気づいたようだった。

「携帯電話から二人に電話などしたことはない、と否定しています。一方で、橋元理子との関係は、認めています。事件一ヶ月前にバーで知り合い、すぐに体の関係を持ったそうです。速水の自宅やホテルで関係を重ね、薬物については二回目の時にはじめて理子に勧めたと認めています。事件の夜も理子といっしょに寝室で薬物を飲んだと言っています。ただ、理子の遺体からは薬物は検出されていません」

祥子はうわずった声で、一息にまくしたてた。清水は、よけいな口をはさむなど言いたげに、祥子をにらみつけている。しかし祥子はそのまましゃべり続けた。

「橋元理子といっしょに薬を飲んだあのことは、よく覚えていない、と言います。飲む量をまちがえたのか、そのあとからひどい幻覚に襲われた。気がついた時は、警察病院のベッドの上にあった、と。三人の殺害については否定をしています。コジローが自分のアカウトであること、現場にあったカメラとパソコンが自分の物であることは認めています。自分で撮影した動画をインターネットに公開することに橋元理子が興味を持ってくれたので、実演してやるつもりで持ってきたのだということです。その他、津田美和子を刺殺したナイフは自分の物、掛井真理に火をつけたライターも自分の物、ガソリンを入れたペットボトルは自分が用意した物ではないと言っています。速水の話はとにかくちぐはぐで、事実と矛盾することも多く、そのまま信頼はできません。ですが、すくなくとも精神異常者の意味のない供述でないことは確かです。真相究明をふきらめて不起訴を決めた上の判断は、まちがっていると思います」

と、最後は勢いあまって、本音が口をついた。この本音は、今まで清水にうちあげたことはない。

「……供述している時の速水の様子は？」

今井は祥子にたずねた。清水に対する物言いにくらべ、わずかにやわらかい口調だった。しかし、取り調べに立ち会っていない祥子は、その問いに答えることができない。

祥子は清水を見た。清水は渋い顔をしていた。祥子の差出口が不快だったのか、あるいは、ついに今井の関心をひきよせた喜びを隠しているのか。

「速水は怯えていました。おそらく、自分が殺してしまったのかもしれない、という不安があるのだろうと思いました」

「……二三〇一号室には、四人以外の人物は本当にいなかったのですか」

今井も、今度は清水の方を見てたずねた。

「はい。四人以外には、いませんでした。2LKのふつうのマンションです。隠れる場所も逃げる場所ありません。天井裏にはあがれない構造です」

「では、速水が犯人だとしか考えられないのではありませんか。それでも君は、速水が殺したのではないと？」

「そうです」

「なぜ？」

「それをこれからお話しします。もし、聞いていただけれるなら、ですが」

清水はもう勢い込むことはなく、つとめて冷静に、正面から懇願した。

今井はどうとう根負けした。

「では、手短に」

銀座のほずれにある高級クラブ『ロンド』では、ママの夏木泰子が開店準備の手をとめて応対してくれた。ハッキリした目鼻だちの、声の大きな女だった。

『ロンド』は、雑居ビルの地下一階にあった。他のテナントは歯科医や地方紙の支社、画廊などで、飲食店は一軒もなく、『ロンド』も目立つような看板は掲げていない。

そのような目立たない外観の、しかも完全会員制のクラブということで、政界財界の要人が、人目をはばかる用談によく訪れるのだという。テーブル間の仕切りも高く、営業時間内中は照明も暗めになっているということであった。

ボーイが掃除機をかけている中、泰子はノーメイクにジーパンといういでたちで、一番奥の席に清水を案内した。事件の数日後におこなわれたこの聞き込み捜査には、まだ祥子は帯回していない。

泰子は終始、ため息ばかりついていた。事件のあとは、一週間ほど店を開けられなかったという。橋元理子の死は、泰子だけでなく店で働くすべての従業員に、おきなショックを与えた。

「いまだに、店に出てこれられない子がいるんです。ここにくると、どうしても理子ちゃんを思い出してしまうからといって」

「それだけ慕われていたということですね」

「ええ。面倒見のいい子でしたから」

泰子は目を伏せ、力なく声を落としました。

「事件を知った時は、驚かれたでしょうね」

「信じられませんでした。まさかあの子が、こんなことに巻き込まれるなんて」

「橋元さんは、どのような方でしたか」

「しっかり者で、頭のいい子でした。若い子の相談によくのってあげていたし、私も頼りにしていました」

「もうこの店には長く？」

「五年になります。でも私たちが知り合ったのは、もっと前です。私のいた店に新人が入ってきて、そこで仲良くなり、私が自分のお店をもつ時に、いっしょに来てもらったんです。私にとっては、妹みたいな存在でした。理子ちゃんも二人きりの時には、私のことをお姉さんと呼んでくれていました」

「橋元さんは石川県のご出身ですね。ご家族はいないのですか」

「ご両親は、理子ちゃんが二十歳の時に亡くなっているんです。金沢で事業をしていたお父様が交通事故で亡くなり、残された借金に絶望したお母様も、理子ちゃんを残して自ら命を絶ってしまったのだとか」

「そうでしたか」

「兄弟も、頼れる親戚もいなかった理子ちゃんは、通っていた大学を退学せざるをえず、単身上京して、生活のために夜の世界に身を投じたとか、そう言っていました。私と出会ったのはそのすぐあとですが、第一印象から、他の子とはちよっと雰囲気がありました」

「どんなところが？」

「年よりずっと大人びていて、はしゃいだところがまったくないんです。私は新人の教育

係を任されていたんですが、教える必要もないくらい、なんでもそつなくこなして、年配のお客様にも上手に話を合わせていました。あの子には、ゴルフという強みがありましたから」

「学生時代は、かなり優秀なプレイヤーだったようです。部屋の中にもアマチュア大会の優勝トロフィーがたくさん飾ってありました」

「亡くなったお父様が、娘をプロにさせたいという夢を持っていました。物心ついた時からクラブを握らされていたと、理子ちゃんも言っていました。お父様が事故に遭わなければ、そのままプロを目指していたんじゃないかしら。東京へ来てからは、練習場にも行かなくなったそうですけど」

「お客さんからプレーに誘われることもあったでしょうね」

「でも、その手のお誘いはすべてお断りしていました。いっしょにコースを回って実力を発揮してしまえば、負けたお客様は気分を害されるでしょうし、かといって、わざと負けお追従をならべるようなことは、できない子でした。そういうところはプライドの貴子子で、お客様の中には可愛げがないと腹をたてる方もいらっしやいましたが、理子ちゃんには気にもとめていませんでした。自分のこと以外にも、たとえば他の女の子が困らされている時なんか、お客様に対しても物怖じせずハッキリ物を言ったりして。だから周りの子からも慕われていたんです。経営者としては、ハラハラするようなこともありましたけれど」

「お仕事以外の交友関係について、何かご存じですか。交際している男性とか、プライベートの友人を紹介されたことは？」

「ありません。お友達は、あまり多い方ではなかったと思いますよ」

「いっしょに被害にあわれた二人の女性、津田美和子さん、掛井真理さんのことは、ご存じでしたか」

「わたしが？ いいえ、知りません」

「その二人と橋元さんとの関係が、目下のところ不明なのです。なにかお心当たりはありませんか」

「どうかしら。スポーツジムには週何回か通っていたみたいだから、そっちのお友達かもしれない」

「いえ、そちらはもう調べたのですが、津田さんも掛井さんも、会員ではありませんでした。…それでは、逮捕された速水という男のことは、何かご存じですか？」

「知りません。例の週刊誌の記事は読みましたけれど」

清水は速水の顔写真を見せた。髪の毛を金色に染めて、酒場ではしゃいでいる写真だった。

素子は顔をしかめ、頭を振った。

「こんな人、見たこともありません」

「店に来たことありませんでしたか」

「とんでもない。もちろん、ありません」

「たしかですか」

「たしかです」素子はひどい侮辱を受けたといったように、眉間のあたりを険しくした。

「私は一度おみえになったお客様の顔は忘れません。うちは完全会員制ですし、こういう

感じの人が気安く敷居のまたげる店ではないつもりです」

「この手の人とは、どういう意味ですか」

「軽薄で中身の無い人、という意味です。仕事もせず、フラフラ遊び歩いていたような人なんでしょう」

「でも、金は持っていたようですよ」

「関係ありません。品格の問題です、人としての」

「しかしこういう男と、橋元さんは親密に交際をしていたわけですが」

「だから、びっくりしているんです。どうしてそんなことになったのかしら。普段のあの子なら、絶対にそんなことはしません。男の方が、無理やり関係を迫ったんじゃないんですか。新聞やテレビの言っていることは絶対おかしいって、お店のみんなで腹をたてているんですよ」

事件を伝える一般の報道は、速水については詳しい記事をひかえる反面、なぜか被害者の理子について、薬物を常用していた遊び好きのホステスといったイメージを強調しがちであった。

「橋元さんには、バーへひとり酒を飲みに行くような習慣がありましたか」

「それも、なかったと思います」

「ですが、実際にはそこで速水と知り合っているのです」

「すくなくとも、習慣ではなかったはずですよ。こんな仕事をしていても、あの子はあまりお酒は強くありませんでしたし」

「そうですね。しかし彼女の部屋には、小さなワインセラーがありましたよ。中は空でしたが、食器棚にはブランドグラスや氷の容器もありました」

「それは、あの子が自分のために買った物ではないでしょう」

「では、誰のために？」

「そんなこと……」野暮なことを聞くものだ、という顔をして、泰子は清水を見た。「あなた、理子ちゃんのマンシヨンの名義はお調べになりました？」

「ええ。橋元さん本人の名義となりました」

「でもまさか、理子ちゃんが自分のお金で買ったとはお思いにならないでしょ？」

「まあ、そうですね。はやり、スポンサーがいたわけですか」

「もちろん。あれだけの美人ですもの」

「そのスポンサーは、このお店にもやってきますか」

「昔はね。でも、今はばったり来なくなりました。理子ちゃんとはとっくの昔に別れていますから」

「そうでしたか。相手の男性は、どのような方ですか」

素子のこめかみが、ピクリと動いた。余計なことを言ってしまった、という後悔の色が一瞬だけ浮かんで消えた。

「それはお答えできません。事件とは関係のないことですし」

「ひょっとして、背の高い、白髪の男性ではありませんか。三つ揃いに、ソフト帽をかぶった」

マンシヨン警備員は、理子をたびたび訪ねてきた年配の男がいたと証言した。清水が言ったのは、その警備員が話してくれた男の風貌であった。

まあ、と素子は声をあげて驚いた。凶星であったらしい。

「でもまさか、その方が事件に関係しているとおっしゃるのではないでしょう？」

「そういうわけではありません。いまのところは、ですが」

「それでは申し訳ありませんが、やはり私としては、お客様に迷惑をかけるわけにはまいりません。詳しいお話は、遠慮させていただきます。ただ、大会社の役員をしておられるお方、とだけ申し上げておきましょう」

泰子はきっぱりと言いつつ切った。しかしそのあと、頬に手をあてた顔をうつむかせ、

「……でも、もしかしたら、理子ちゃんがひとりでバーへ行ったりした理由は、この別れ話の原因かもしれませぬね」

「それは、どういう意味ですか」

「理江子ちゃんは頭のいい、しっかりした子でしたけど、男と女のこととなれば、やっぱり他のこととは違います。ようするに、さっぱりとした、きれいお別れにはならなかったようなんです。どちら側がどうだったとか、詳しいことはもちろん知りませんが、話がかじれて、なかなか決着がつかない様子でした。その頃から、理子ちゃんがいつもと違う感じだったことは、事実です」

「具体的には？」

「沈みがちだったし、考え事をしていることが多かったようです。無理もありません。プライベートもそうですが、理子ちゃんにとっては一番のお客様を失ってしまったわけですからね。正直なところ、お店にとっても痛手でした。理子ちゃんの売り上げの大半は、その方からのものでしたから。理子ちゃんだって、強がってはいても、内心では動揺していたと思います。私もそれとなく励ましたりはしていましたが、やっぱりひとりで悶々と苦しんでいたんじゃないかしら。それで、つい自暴自棄になって……」

「いつもなら、やらないようなことを？」

「そうでなければ、考えられません。あの子がひとりきりでお酒を飲みにいったり、若い男の人を自宅につれて帰ったり、ましてや変な薬に手を出すなんて。きっと気が弱っているところをつけこまれてしまったんだと思います」

「確認ですが、橋元さんがスポンサーの男性と別れたのは、いつごろの話ですか」

「去年の秋です。ですから、半年前くらい」

「彼女が速水が知り合ったのは、一ヶ月前なんです。五ヶ月たってもまだ、ひきずっていったということですね」

その点が、やや腑に落ちない。どのような別れ方だったのかはわからないが、そのような未練な姿は、これまでに聞いた橋元理子の人物像とは一致しないような気がする。

「ところで、検死の結果、橋元さんは数ヶ月前に左腕と肋骨に骨折の怪我をしているのですが、その理由をご存じありませんか」

泰子は怪訝層に眉をひそめた。

「数ヶ月前の骨折が、今度の事件と何か関係があるんですか」

「どうですか。たぶん、ないでしょう。でもいちおう、怪我の理由は知っておきたいと思ひましてね」

「たしかに、包帯とコルセットをつけてお店にきていた時期がありました。本人は、スポーツ・ジムでスカッシュをしていた時に転倒したと言っていましたけど」

津田美和子が勤務していた信用金庫の支店は、利根川沿いに残る田園風景に囲まれた、古くてちいさな建物だった。美和子は川向こうのアパートから、自転車で乗って通勤していたという。

職員は十七名。金融機関らしい冷たい雰囲気はまったくなく、支店長以下、アットホームで家族的な経営がモットーであるという。待合室には幼児向け絵本が並び、カウンターの隅には、ボタンインコの鳥カゴと、金魚の水槽が置いてあった。

清水が訪問した時は、支店長は留守だった。人手不足のおりから、支店長自ら営業に出て、地域の中小企業を駆け回っているのだという。

かわりに対応してくれたのは、若い男女の職員だった。

営業時間が終わった午後五時半。店内の一角にある小テーブルを囲み、三人は鼻をつきあせるような距離で、ちいさな椅子に腰をおろした。

渡瀬という背の高い男性職員は、津田美和子とは同期ということだった。

「彼女とは、いっしょに研修を受けた時から仲よしでした。ニュースを見た時は信じられませんでした。同姓同名の別人であってくれと、最後まで祈っていたのですが……」

「津田さんは、地元の商業高校を出て、こちらに就職されたんですね」

「そうです。僕は卒なので、年は四つ離れています」

「私は津田さんの高校の後輩です」

長瀬という女性職員は、そばかすだらけのあどけない顔をした女の子だった。

「津田さんには一から仕事を教えてもらいました。とっても頼りになる、大好きな先輩でした」

二人は言葉こそハキハキとしていたが、終始、伏し目がちだった。同僚の死に、いかにもショックを受けているといった様子だった。

受け答えは主に渡瀬がとつめ、長瀬は時々、横から口をそえた。

「津田さんは、こちらではどのようなお仕事をされていますか」

「事務一般です」

「外回りに出ることもありましたか」

「いいえ、内勤専門でした」

「窓口業務も？」

「それは長瀬君たち、若手の女子が交代で担当しています。美和ちゃんは、それ以外のことを何でも、といった感じでした」

「このディスプレイも、ぜんぶ先輩が一人で作ったものなんですよ。手先が器用で、デザインも上手でした」

店内には、色紙を切り抜いた手作りの保険の広告が、壁一面に貼られていた。POPの文字やイラストなど、学校の工作のような拙さがかえって良い塩梅に、押しつけがましきのないあたたかみを醸している。

「地味な作業もいやがらず、こつこつとよく頑張っていましたよ。インコや金魚の世話も、もっぱら美和ちゃんの担当でした」

「私たち若手も、困った時はなんでも津田さんに相談していました」

「内勤でも、顧客対応なり、応接なり、そういった業務はおこなうのでしょうか。津田さんも含めて」

「もちろんです。」

「こちらの信金は、都内の企業や商店とは、取引はありますか」

「それはさすがにありません」

「個人の方も？」

「はい」

「それでは津田さんの交友関係について、ご存じのことはありますか。お友達は大勢いるようでしたか」

「さあ。付き合いは、広い方ではなかったと思いますよ。どちらかといえば物静かで、引っ込み思案なタイプでしたから」

「SNSなどを通じてのお友達がいた、ということは」

「おそらく、ないでしょう」

「交際している男性はいませんでしたか」

「まさか」

長瀬は言下に否定した。一瞬、口の端に笑みが浮かびかけたように見えた。

渡利がすぐに言葉を継いで、

「いれば気がついたはずですよ。うちの若い職員は、みんな仲がいいから。でも、そんな話が出たことは、いちどもありませんでしたね。……失礼ですが、先ほどからどういう趣旨で質問をされているのでしょうか」

「じつは、津田さんいっしょに被害にあった橋元理子さんと掛井真理さん、この二人と津田さんがどのような関係だったのか、まったくわかっていないのです。それから容疑者の男との関係も。……今回の犯人に関する週刊誌の記事は、お読みにになりましたか」

「はい、もちろん」

「速水という男のことについて、何かお心当たりは？」

「とんでもない。あんな変質者と美和ちゃん相知り合いだったはずはありませんよ」

渡利は語気を強めてそう言った。その横で、長瀬が何度もうなずいた。

「しかし事件の少し前、速水から津田さんの携帯電話に、何度か連絡をいれているのです」
「それは、何かのきっかけで番号を知った男の方が、一方的にかけていただけじゃないですか。美和ちゃんもともと、携帯電話をほとんど使わない人でした」

たしかに津田美和子の携帯電話は、二十代の女性とは思えぬほど電話帳の登録件数が少なかった。

「それでは津田さんのご家族について、何かご存じのことはありますか」

「たしかご両親は離婚していて、お父さんと暮らしているんじゃないかな。体が悪くて、美和ちゃんが介護をしていたはずですよ」

「ちがうわ。そのお父さんは、去年かおとしに、亡くなって、いまは独り住まいのはずよ」

「そうだった。……たしか、兄弟はいなかったはずですよ。お母さんは別の男性と再婚していて、いまでは音信不通だと、いつか誰かが話していました」

父親がどんな病気であったかについては、渡利も長瀬も知らなかった。

「津田さんの日常は、どのような暮らしぶりだったでしょう。仕事以外ではどんなことをされるが多かったか、教えてください」

渡利と長瀬は、たがいの顔を見合わせた。

「そういえば、趣味の話なんかは聞いたことがなかったな」

「わたしも。……あんまり自分のことは話さない人でしたから」

「では、お休みの日に東京に遊びに行っていたような様子がありましたか？」

「どうかなあ、そういうタイプでもないと思いますよ」

「私もそう思います。にぎやかなところは苦手だって、言っていた記憶があります」

「では、旅行はどうでしょう。先ほど総務の方からお聞きしたのですが、津田さんは仕事を休むことが多かったとか。有給休暇も、毎年すべて使い切っていたということでした」

「それは、お父さんの介護があったためでしょう」

「ですが、お父さんは昨年か一昨年に亡くなられているということでしたが」

「まあ、それはそうですが……。いずれにしても、旅行が趣味だったとは思えませんね。去年の連休、職員全員で旅行に行ったとき、電車の乗り換えでえらくまごついて、みんなを待たせたりしていましたから。あれはとでも、旅慣れているといった感じではなかったなあ」

渡利は同意を求めるように、長瀬を見た。長瀬はうなずいて、

「先輩は、体調を崩してお休みすることが多かったようです。いつも当日の朝に電話で連絡があつて、支店長が怒っていました」

「そうそう。彼女、どういう訳か上司からのウケが悪くてね。特に支店長からは目の敵にされて、よく叱られていました。それが理由で出勤するのに気が重かった、という日もあったんじゃないかな」

「それは、いわゆるパワーハラスメントではありませんか」

「うーん、それほど大げさな話でもないんですが。彼女も人との接し方という点で、ちょっと不器用なところがあつたのは事実です」

「津田さんの使っていたデスクはどちらですか」

「あそこの壁際の机です。今はちよつと荷物を置かせてもらっていますが」

「彼女の私物は？」

「たいした物はありませんでしたよ。いちおう休憩室にまとめてあります。ご覧になりますか」

清水は渡利の案内で、二階の休憩室に移動した。

そこには仕事を終えた他の職員が数人、お茶を飲んだり煙草を吸ったりしていた。清水の姿を見ると、それまで談笑していた口をいっせいにつぐみ、好奇心と警戒心のまざった視線を清水に向けた。

休憩室は、更衣室をかねていた。狭い室内の壁際に細長いロッカーが十五ほどならんでおり、男性用女性用のあいだに、申し訳ていどの仕切りが立っている。

津田美和子が使用していたというロッカーからは、すでに名札が外されていた。渡利はちいさなダンボール箱を持ってきて、清水の前に開けてみせた。

薄いピンクの膝掛けと、折りたたみの傘が一本。赤と黒のボールペンが一本ずつ。

「これだけですか」

「ええ。なるべく私物は置かない決まりになっていきますので。じつはこれ、処置に困っていたところなんです。捨ててしまうのも、なんだか美和ちゃんに悪いようだし……。できれば警察の方で、持っていっただけませんか」

このような物は証拠品にもならない。しかしなぜかことわる気になれず、清水は膝掛けと傘を取り出した。たったそれだけで空っぽになってしまった箱の軽さが、何やらもの悲しかった。

清水はその場にいた他の職員たちにも、津田美和子のことをたずねてみた。美和子のことを悪く言う者はおらず、皆が彼女の真面目さ、実直さ、辛抱強さを褒め称えた。ただ、彼女自身のことをよく知る者は、やはり誰もいなかった。

休憩室の壁には、一枚の写真が額に入れて飾られていた。入り江を見下ろす展望台で撮影したもので、年寄りから子供まで、総勢四十人近くの集合写真であった。

「この写真は、みなさんでご旅行に行かれた時のものですね」

「ええ。去年のゴールデンウィークに、みんなで旅行へ行った時のものです。職員全員が家族をつれて、伊豆へ行ってきました」

津田美和子は、いちばん端に写っていた。他の職員たちがそれぞれ自分の家族とならんで白い歯を見せている中、ひとりきりでぼつんと離れた位置に立っている。身にまとっている黄色いワンピースは、事件の日に来ていたのと同じものようだった。

「それにしても、ずいぶん沈んだ顔をしていますね」

「そんなことはありません。彼女はもともと、そういう顔つきなんですよ」

職員のひとりだが、強い調子で言った。彼に同調するように、周りの職員たちは互いの顔を見てうなずきあった。

たしかに、微笑んでいるようでもある。しかし、笑顔というよりは泣き笑いに近い表情で、すくなくとも旅行を楽しんでいる様子は伝わってこなかった。

「そういうところは、ちょっとかわいそうな子でした」渡利も声を落としてそう言った。

「窓口業務から外されたのも、それが理由でしたからね」

「どういうことですか」

「まだ僕らが新人だった頃、お客様からクレームがついたんです。今度入った女職員、あれは何だと。ぶすつとして感じて悪い、愛想笑いもできないのか、と。支店長は口癖のように、笑え笑えと彼女にプレッシャーをかけていました。それでも美和ちゃんは、上手に笑うことができませんでした」

「うちの女の子はまた、どういうわけか、かわいい子が多いから」先ほどの職員が冗談めかして言った「気の毒に、彼女だけが変に目立ってしまったね」

清水は不快感をこらえ、もういちど写真の美和子に目をむけた。

たしかに、器量が良いとは言いがたい。美人をあらわす形容がいろいろあるとして、美和子の容貌は、どれひとつそれにあてはまらないだろう。口の悪い者なら、いくらでも悪罵の言葉を思いつくであろう。

津田美和子の内向的な性格が、この外見を理由にしたものだとするれば痛ましい。一方で、そのような美和子であればこそ、遊び人の速水とのあいだに、いったいどのような接点があり得るのか、その点はますます不可解であった。

掛井真理の生家は、山梨県の山奥にあった。

丘陵の裾になまこ塀で囲われた広い敷地があり、黒々とした屋根瓦の母屋と、離れが数棟。一角には土蔵まである。見るからに累代の旧家といった様相で、真理はこの家に、両親と妹夫婦の五人で暮らしていた。他に、住み込みの使用人が四人いた。

父親の掛井寛一は、県会議員を四期もつとめる地元の名士だった。真理の曾祖父の代から受け継がれている議席で、戦前は一帯の大地主、その前は庄屋を務めていた家柄だといふ。

はるばる東京から足をはこんだものの、真理の父親は多忙、母親は病にふせているということで、どちらも面会がかなわなかった。真理の四つ違いの妹は仁美という名で、夫は彼女の父親の秘書をしていた。この妹も、はじめは清水に会おうとしてくれなかったが、電話口でねばりづよく説得をし、ようやく門を開かせることに成功した。

清水が通されたのは庭に面した広い和室だった。床の間のかわりのように巨大な仏壇が据えてあり、欄間には代々の一族の遺影がずらりとならんで、訪問客を見下している。

その中に、真理の写真はなかった。

仁美はあからさまに迷惑げな顔つきで、清水を迎えた。反面、これまでの鬱積したものを吐き出す相手を得たという昂ぶりに、声が震えていた。

「お姉さんのお葬式はあげなかったそうですね」

「はい。東京でお骨にして、帰ってきたその足で納骨しました」

「それはまた、どういうわけで」

「どういうわけ？ あんな死に方をされて、まともなお葬式なんて、あげられるはずがありません。世間の目というものがありません」

「お姉さんは被害者ですよ」

「同じことです」

「どういう点が？」

「ここは田舎です。都会とは物の見方がちがうんです。世間をお騒がせしたというだけで、じゅうぶん肩身の狭いことなんです」

「それは、しかし、お姉さんがお気の毒なのではないでしょうか」

「あなたのような方には、わかりません」

仁美は清水をにらみつけ、ギリツと唇を噛んだ。

「あの姉にはこれまでも、ずいぶん振り回されてきました。周りに迷惑ばかりかけて、自分ばかり好き放題にやって、父も私も、どれだけ恥ずかしい思いをしてきたことか。あげくのほかに、こんな死に方をして。まるで嫌がらせです。最後の最後まで、迷惑のかけられ通りでした」

仁美は早口に、姉への恨み言をならべた。彼女の憤慨は、事件を起こした速水にではなく、すべて姉の真理に向けられているらしかった。

「お姉さんは、以前、東京にお住まいでしたね」

「ええ」

「それは、学校へ通うため？」

「はじめはそうです。向こうの女子大に通うため、父にマンションを借りてもらって、そこで一人暮らしをしていました。卒業したらこちらにもどってきて結婚をする、というのが条件でした」

「お姉さんには許嫁がいたのですか」

「具体的な相手がいたわけではありません。でも、私たちには男兄弟がいませんから。当然、長女である姉が、父の後継者をお婿さんにとるものと、誰もがそう思っていました。それなのに、姉は約束を反故にして、勝手に向こうの企業に就職してしまっただけです」

「ですが、お姉さんがそういう結婚を望まなかったのなら……」

「望む、望まないの問題ではありません。うちは、普通の家ではないんです」

そう言って、仁美は頭上をとりかこむ遺影をぐるりと見回した。立派な額縁におさまった故人たちは誰も彼も重々しい仏頂面をしている。

「お姉さんは東京で、どんな仕事をされていたのでしょうか」

「はじめは出版社で、旅行雑誌の編集をしていました。べつに、どうしてもその仕事につきなかつたわけではないんです。ただ、こちらに帰ってくるのがイヤだっただけです。最初のうちは、取材で海外旅行に行ったり、頼んでもいない土産ものを送りつけてきたり、それはいい気なものでした。でも会社の経営が悪くなつてクビにされると、あっさり服飾関係に転職して、でも、そちらも長続きしなかつたようです。それから、職を転々としていました。経済的にも、困ることが多かつたみたいです。父や私に内緒で、母に時々、金銭を無心していたようですから」

「その間、たとえみじかい期間でも、水商売の仕事をしていたということはないでしょうか。あるいは一時期、茨城県に住んでいたことは？」

橋元理江子、津田美和子との接点を探る質問であつたが、仁美はどちらも否定した。

「姉はお酒に酔つた男の人が大嫌いでした。小さい頃からそういう大人に囲まれて育ちましたから、姉も私も。それに、都会の生活に憧れていた姉が、わざわざ田舎に引っ越すとは思えません。こちらに引き上げてくるまで、最初のマンションに住み続けていたはずです。海辺の丘の上のデザインマンションで、窓を開けると潮風が入っている、なんて自慢していたくらいですから」

「お姉さんの東京でのお友達や知り合いについて、ご存じのことはありますか」

「ご存じもなにも」と、仁美の表情がいつそう険しくなつた。「おかげで大変な恥をかかされましたよ。私もしばらくは、恥ずかしくて外を歩けないほどでした。姉には本当に、掛井の名を傷つけられました。そのことは今でも、心の底から恨んでいます」

「いったい、何があつたのですか」

「詐欺ですよ。結婚詐欺にあつたんです」

仁美によると、真理はある日突然、東京からひとりの男をつれて帰り、彼と結婚するのだと宣言した。ところがこの男が詐欺師だつたのだという。

事の起こりは、父親の寛一が強引に進めた縁談であつた。

寛一には、この男こそ自分の後継者にといい定めている秘書がいた。掛井家の理屈では、真理は当然、その秘書と結婚するべきであつた。この縁談に対し、真理は首を縦にふらず、かといつてははっきりと拒絶をすることなく、言を左右に一日延ばしにしていた。上京する

際の約束の手前きっぱりと拒むことができず、くずくず時間をかせぐことで事態をウヤムヤにしようと考えたらしい。

むろん寛一としては、それではすまない。しびれをきらした彼は後援会とも諮り、強引に結納の日取りを決定してしまった。ちょうど真理が転職を繰り返していた時期のことだった。

知らせを受けた真理は数日後、予告なしにひとりの男をつれて帰ってきた。やけに身なりの良い、年下の男だった。

自分はこの男性と結婚すると、真理は一方的に宣言した。寛一は激怒し、一族をあげて猛反対したが、真理は既成事実を作るため、結婚式の案内を勝手に作り、村中に配ったうえ、各方面への挨拶回りをすませてしまった。掛井家の長女から直接結婚の報告を受け、誰もがこれを祝福しないわけにはいかなかった。口先の追従だけでなく、この時はまだ、自分の意思を貫きとおした真理の行動力を褒めそやす声もあった。

寛一にとって、村人への体面はなによりも大事な事柄だった。真理が先手をうって作り上げた既成事実を前に、寛一は折れた。問題は、相手の男が掛井家の後継者たりうるか、という点であった。親兄弟とは死に別れ、他に身よりはないということであったが、本人の申告による学歴職歴は申し分なかった。本人も、政治家になることは子供のころからの夢である、ということを熱心に語った。

真理自身は、家を継ぐことには断固反対したものの、将来のことは時間をかけて話し合うという折衷案のもと、二人は親族の了承を得た。

ところが式をあげる直前に、男は突然失踪してしまった。「翌日、東京の刑事さんが二人お見えになつて、あの男が手配中の詐欺師だったと教えてくれました。捜査の手がのびていることを察知して、姿を消してしまつたようです。家の者は全員、事情聴取を受けました。その中で、姉が自分の貯金や持っていた貴金属のすべてをあつた男にわたしていたことがわかりました。掛井家からも、結婚の支度金のようなものが、まとまった額の金をわたしていたのですが、それらはすべて、持ち去られてしまいました」

男はその後、逮捕された。しかし、奪われた金品はもどつてこなかった。

「お金なんか、どうでもいいんです。問題は、私たちが村中の笑いものになつたということです。私なども、恥ずかしくてしばらくは外出もできませんでした。ところが姉はいい気なもので、まるでこんな騒動はなかつたかのように、あいかわらず都会暮らしを謳歌し続けているのですからね。ほとほと愛想がつかまりました。この件で、父も姉にはきっぱり見切りをつけて、私も自分が家を継ぐのだという覚悟を決めました」

そして仁美は、本来は真理の相手となるはずだった秘書と結婚した。婚礼は盛大におこなわれたが、真理は招待しなかつたという。

真理とは音信不通になつた。もっとも真理は、母親とだけはこっそり連絡を取り合っていたらしい。その後も意地を張って東京での生活を続けていたものの、いろいろとうまく行かず、結局は母親に説得されてこちらに帰ってきた。それが、今回の事件の半年前のことである。

「さぞかし肩身がせまかつたことでしょう。道を歩いていただけで、こそこそ陰口を言われてしまうような有様でした。私はいい気味だと思つていましたが、村の中には同情して

くれる方もいて、いくつも縁談を持ってきてくださったのですが、姉が片っ端からお断りするもので、そのうち腹をたてて話をもってきてくれなくなりました。そういう態度も含めて、姉は村の人たちからは反感を買っていて、そのことがずっと私たちの悩みのタネになっただけです」

「お姉さんの部屋を見せていただいてよろしいですか」
清水は真理が使っていたという離れを見せてもらった。隙間風の吹きこむちいさな平屋であったが、水回りは整っていて、母屋から独立して生活することができる。真理もそのようにしていたという。

黒ずんだ柱の八畳間には、部屋の趣とは異なる都会的な家具や調度品がならんでいた。いずれも長年使い込んだ古いもので、クローゼットに大切に収納されていた衣服も、流行遅れの色あせた物ばかりであった。

「お姉さんのこちらでの暮らしぶりには、いかがでしたか」

「知りません。私たちのいるお宮へは、いちども顔を見せたことがありませんから」

「ご病気などは？」

「わかりません。お医者にかかっていたようなことは、ないと思いますけど……。どうしてそんなことをお聞きになるの？」

「お姉さんのご遺体を調べた時、痩せ方がやや普通でないように思えましたのでね」

「それなら、もともと細い方でしたから」

「こちらにもどってきたあと、誰かと連絡を取り合っているようでしたか？」

「それも知りません」

「事件の日、お姉さんは東京へ何をしにいらしたのでしょうか」

「わかりません。べつに気にもとめませんでした。それまでも、母からお小遣いをせしめて、しょっちゅう東京へ行っていたようです。よっぽどあちらの生活に未練があったのか、そうでなければ、私たちと暮らすこと気づまりだったのでしよう。私は、いつ出かけていっただけ帰ってきたかともわかりません。あの日だって、事件のニュースを見てはじめて向こうへ行っていたのだと知ったくらいです」

「なぜお姉さんは、あのような事件に巻き込まれてしまったのでしょうか」

「知りません。知りたくもありません。今はただ、みなさんが早く忘れてくれるのを願うだけです。事件のことも、姉のことも」

「真理の遺品の中には、とくに手がかりになるような物はなかった」

「さあ、もう気がすんだでしょう。見るものを見たら、お引き取りください」

清水は追い立てられるように、敷地内にある駐車場まで見送られた。

開けはなした門扉の外に村人が数人、ひそひそ話をしながらこちらをのぞきこんでいるのが見えた。仁美と目が合うと、彼らはおずおずと会釈をしたあと、逃げるように散って行った。

苦々しい表情で彼らの背中をにらみつけながら、仁美は清水に言った。

「姉が殺されたって、私は悲しくともなんともありません。この事件は、私たちにとって迷惑以外のなものでもありません。犯人や裁判がどうなろうと、興味はありません。お願いですから、もうそっとしておいてください。二度とこちらには来ないでください」

清水が最後に事件現場を訪れたのは、捜査の打ち切りが決定する一週間前のことだった。二三〇一号室はすでに清掃がすんでいたが、橋元理子の遺品や家具は、まだそのままだった。室内はひっそりとしていたが、ここへ立つと清水の五感には、あの日の喧噪や血なま臭さがまざまざと蘇ってくるようだった。

清水は靴を脱いで玄関をあがり、廊下をわたってリビングへと向かった。影のようにつきしたが、ついでに祥子が、そのあとに続いた。

リビングはカーテンが取り払われていたが、窓の外は今にも降り出しそうな曇り空で、部屋の中は薄暗かった。大型テレビ、ソファ、ガラスのローテーブルと、中身が空のワインセラー。部屋の隅には観葉植物の鉢がひとつあるきりで、それ以外の装飾はない。ぬいぐるみや人形のたぐいも、ひとつも置いていなかった。

ガラスのテーブルは表面が焦げている。天井にも焦げ後がのこっていたが、床の血の痕はきれいに拭き取られていた。

あの日、この部屋に四人の男女がいた。他にはいなかった。そのうち三人が殺され、ひとりだけが正気を失った姿で発見された。誰が殺人犯かは明らかだ。

しかし、事件は不起訴の線が濃厚だという噂である。犯人の血縁関係が表沙汰になる前に、事態を沈静化させる。裁判などもつての他、ということなのだろうか。

それはよい。いや、よくはないが、どうせこちらの力のおよばない領域の決定である。清水が気を煩わせても意味はない。

ただ、あの日この部屋の中で何が起こったのか。まだそれが解明されていない。そのことだけが、清水の屈託をつのらせるのである。

この部屋を訪れるのも、これが最後になるかもしれない。清水は窓を開けてバルコニーに出た。フローリングと違い、コンクリートの床には若干、洗いきれなかった血の痕がのこっている。その上に点々と落ちている白い汚れは、鳩のフンであろう。

手すりの高さは一・二メートルある。犯人は津田美和子の死体を持ち上げ、この手すりの上にひっつけた。美和子は小太りの体型で、体重は六十キログラムあった。

彼のパーカーには、美和子の体を抱き抱えたような血痕がべっとり付着していた。血は手袋にも付いていたし、その手袋で触ったと思われるカメラなどにも、血の痕はあった。

ただ、取調室で相対した速水の体型は、男としては華奢な方であった。はたして六十キロの人体を一・二メートル持ち上げることが可能であったかどうか。

もっとも、この部屋には彼以外にそれが出来る人物はいなかった。橋元理子や掛井真理を脅して手伝わせたのだろうか。いや、二人にそれほどの腕力がそなわっていたとは考えにくいし、だいいち、この時点で橋元理子は浴室で殺されていた。掛井真理の遺体は損傷が激しかったが、燃え残った部分から血液反応は出ていない。

清水は手すりの外に目を向けた。さえぎる物のない、抜群の見晴らしであった。遠くに見える港。眼下に見えるレンガ道と交番。動画サイトにアップロードされた映像と、まったく同じ風景である。

これだけ見晴らしがよい場所人間を一人、手すりの外に放り捨てるとなれば、当然、人目につくことが予想される。現に、交番の巡査がその瞬間を目撃している。誰かに見ら

れなくとも、死体が発見されれば、その瞬間から騒ぎになる。騒ぎになれば、人が集まる。そうすれば、この場所から逃げることは困難になる。なぜそんなことをしたのだろう。速水ははじめから、逃げるつもりはなかったのだろうか。

清水は室内に入って窓を開けた。それからリビングを突っ切って廊下にもどった。

左手には、キッチン、脱衣場、浴室。右手には部屋がふたつ。そのうちリビングに近い方が寝室であった。大量の化粧品があふれているドレッサーと、ドレスのひしめく大きなクローゼット。このクローゼットは納戸もかねており、消耗品のストックの他、ちいさな工具箱が置いてある。中身はドライバーやメジャーなどであったが、その中に、ナイロンの結束バンドが、袋入りの束の状態で見えられた。

このバンドにより、橋元理子と掛井真理は手首と足首を縛られていた。津田美和子の遺体には手足の拘束はなかったが、リビングのソファの下から、結末後に切断されたバンドが二本、発見されていた。これはナイフによって美和子を刺殺した後、バルコニーに運び出す前後に切断したものと見られている。

セミダブルのベッドの上には、掛井真理のスーツ、理子が着ていたと思われるシルクのパジャマが脱ぎすてられていた。パジャマの背中部分には、ふた筋の赤黒い汚れが付着していた。これは分析の結果、津田美和子の血液であることが判明している。なぜこのようなどころに美和子の血がついているのか、理由はわかっていない。

ナイトテーブルの上には三人の女たちの携帯電話。テーブルの足下には速水のポストンバッグ。ゴミ箱からは、錠剤の入れるプラスチックの包装シートが見つかっている。シートは十錠入りのもので、中身はからっぽだった。速水によると、最後の二錠を理子と一錠ずつ飲んだ、ということである。

寝室の隣は洋間になっていた。フロアマットが敷きつめられ、壁には大きな鏡と、エアロバイクが置かれている。体を動かすための部屋だったらしい。

部屋の隅に白いチェストがあり、その上に、小ささまざまなトロフィーがならべられている。すべてゴルフに関するものだった。小学生大会の団体優勝からはじまり、中学高校大学を通じて優秀な戦績をおさめ、アマチュア選手権では二回も優勝している。なかなか有望な選手だったらしい。両親の死でプロへの道を断念したことは、本人も無念であっただろう。

チェストの引き出しにはスポーツウェアの他、ダンベルや、空気を抜いたバランスボールが二つしまっていた。しかし、水着や水泳用キャップ、ゴーグルなど、水泳に関する品はなにも見当たらなかった。

橋元理子は競泳用の水着を着て死んでいた。あの水着は、理子自身の物だったのだろうか。理子が通っていたジムには、プールもあった。しかしトレーナーの話では、彼女が泳いでいるところは見たことがないという。

橋元理子だけではない。死んだ彼女たちの着衣は、大きな疑問のひとつだった。

今のところ津田美和子の黄色いワンピースだけが、本人の物ということがわかっている。橋元理子の水着も、もしかしたら本人の物かもしれない。しかし、掛井真理のウエディングドレスは、さすがに本人の物だとは考えにくい。そして本人の物か否かにかかわらず、理子と真理がなぜ水着やウエディングドレスを着ていたのか、その理由はわからない。

殺人ビデオを撮影するにあたっての趣向として、速水が無理やりに着せた、という見方

はありうる。だがその場合、速水はウエディングドレスを事前に調達し、二三〇一号室に持ち込んだことになる。ポストンバッグに入れて持ち込むことは、たしかに可能ではあっただろう。だが、掛井真理にウエディングドレスという組み合わせが、清水にはどうしてもひっかかるのだ。

掛井真理の死装束として、ウエディングドレスはあまりにも皮肉がききすぎている。はたしてこれが偶然か。偶然でないとすれば、速水は結婚にまつわる真理の不幸な葛藤を、すべて知っていたということになる。

掛井真理のウエディングドレスが何らかの皮肉であったとして、では橋元理子は水着はどうなのか。これももしゴルフウェアであったなら、あるいは同じような皮肉を、そこにくみ取ることも出来たかもしれない。だが、橋元理子と水泳をむすびつける特別な線は、いまのところ見つからない。

まして津田美和子の場合は、ごく当たり前に自分の私服のまま殺されている。不可解は不可解なりに、そこに一貫性があるのなら、まだしも何らかの解釈がなりたつ余地はある。しかしこうチグハグでは、仮説のたてようもない。

洋間の向かいは、脱衣場と浴室である。浴室は木目調のタイルの広々とした空間だった。浴槽はシェル形で、底の部分がひとまわり狭く窪んでいる。清水みずから試してみたことだが、逆さまに突き落とされるとこの窪みに上半身が嵌まりこみ、容易に体をひるがえせない。じっさい、理江子はそのような体勢で溺死していた。

排水口からは、速水の毛髪が発見されている。ベッドに入る前にシャワーをあびたことは、速水も認めていた。脱衣場にはドラム式の洗濯機があって、中には黒いトレーナーの上下と、湿ったバスタオルが二本。バスタオルには、速水と理子の毛髪が付いていた。

清水はリビングにもどり、ソファに腰をおろした。上をむくと、天井には生々しい焦げ痕がのこっている。掛井真理を焼き殺した炎の痕である。

掛井真理の体にガソリンをそそぎ、火をつける。炎があがり、火災警報器が鳴る。マンション中を混乱に陥れ、その混乱に乗じて逃げ出すつもりだったのだろうか。しかし火をつけた時点で、二三〇一号室は警官に囲まれていた。そのことは速水にもわかってはいたはずだ。警察はそれまでさんざん、チャイムや電話を鳴らしてコンタクトをとろうとしていたのだから。これは津田美和子の死体を外に放り出したせいである。いわば、自分で自分の逃げ道をふさいでいるのだ。

はじめから逃げるつもりもない、狂気による確信的な犯行だったのか。殺人の瞬間を動画におさめ、ネットに公開しているのだから、犯行を誇示したかったことはまちがいない。しかしそれならなぜ、逮捕後に自分の犯行であることを否認するのか。

殺人を否定する一方で、津田美和子を切り裂いたナイフが自分の物であることは認めている。護身用にも持ち歩いていた物だということも、進んで供述している。それでいて、ペットボトルのガソリンについては、まったくあずかり知らぬと言う。結束バンドやパジャマの血痕については質問に答えられず、橋元理子にドラッグを与えたことは進んで告白をする。ところが、彼女の体からは薬物が検出されていない。

なにもかもがチグハグだ。ここまで支離滅裂だと、薬物による心神耗弱に理由を求めたくもなる。

この道理に合わせぬ行動を説明しないまま、速水は不起訴処分になるという。刑務所には

入らず、かわりに病院へ送られる。このあと一生、と言いたるところだが、治療のすえ、もう他者に危害はおよぼす心配なしと診断されれば、いずれ社会に復帰するにちがいない。不起訴処分の本当の理由を考えれば、これはゆゆしき問題にちがいない。しかし清水の懸念はべつなところにあった。

もし速水が、彼の言うとおり、三人の殺害に関して潔白だとしたら。

しかし、この懸念は清水だけのものではなかった。他の誰かを説得する材料をなんら持ち合わせていない以上、彼としては、ただ黙って捜査が幕引きになるのを甘受するしかない。

清水はソファの瀬もたれから身を起こした。ふと気がつくくと、うしろに付いてきていたはずの祥子の姿が見えなかった。清水は立ち上がり、祥子を探した。

祥子は洋間にいた。チェストの上のトロフィーを、目を皿のようにしてながめている。

清水の視線に気がつくくと、祥子は電気をながされたように直立した。

「何を見ていた？」

「いえ、べつに……」

祥子は首を振ってごまかしたが、清水の目は、容疑者を尋問する時のように厳しかった。

「本当に、なんでもないんです。ちょっと不思議に思っただけです」

「だから、何が不思議だというんだ」

「トロフィーの日付です。これだけたくさんあるのに、ぼっかりと空いている期間があるんです」

清水は祥子をにらみつけていた険しい眼差しを、トロフィーに向けた。

「そんなことはない。ゴルフをはじめた小学生から、プロを断念する大学生まで、毎年なく、なんらかの大会でトロフィーを獲得している。空いている期間なんてないぞ」

「年月日の『年』だけを見ればそうです。でも『年月』で見ると、およそ一年半、ゴルフをしていなかった期間があるんです」

トロフィーは年月日順に整列しているわけではなかった。清水がためしに並べ替えてみると、たしかに祥子の言うとおり、十八ヶ月もの空白の期間がある。

「いま計算していたんです。この期間は、中学三年生の五月から、高校一年生の十月までにあたります」

「それなら、受験勉強に専念していたんじゃないか」

「橋元理子の経歴は私も読みました。彼女が通っていた私立は、中高一貫だったはずですよ」

「だったら、ただのスランプだったのかもしれない」

「はい。きっと、そうなんだと思います」

「嘘をつくな。そう思わないから、いつまでもトロフィーをながめていたんだろう」

「……でも、根拠なんてないんです、ただのカンですから」

祥子は肩をすぼめて縮こまりながら、ちいさな声で言った。

「カン、か……」

清水はぼつりとつぶやいて、何やら考え込んだ。

叱られたのかどうかもわからず、祥子は立ちつくしたまま戸惑っている。その顔を遠い目つきで見つめながら、清水がその先に思い浮かべているのは、かつての先輩である今井の顔だった。

祥子が清水につれられて『ロンド』を訪れるのは、これが三回目だった。

ママの藤波素子は、訪問するたびに態度がぞんざいになっていった。無理もない。清水にしたところで、何も新しい情報をもたず、犬も歩けば棒に当たるとの心境で、くり返し押しかけている。そのたびに同じ話をさせられる素子にしてみれば、うんざりもするであろう。

この日、素子は留守だった。前日に約束はとりつけていたのだが、急用とのことだった。「でも、急用というのは嘘なんです」応対してくれた店員は、簡単に本当のことを明かしてくれた。「どうせまた同じことを聞かれるだけだ、いい加減にしてほしいと言って、どうでもいい用事を作って出ていってしまったんですよ。あの人は、そういうところがあるんです」

店員は、三谷と名乗った。よく日焼けした五十がらみの男だった。この店でははじめて見る顔だったが、新人にしては泰子について語る口調が狎れている。

その点をたずねると、

「このママとは古いつきあいです。留守にしていたのは、ママの知人が名古屋に新しい店を開いたので、一年ほど助っ人に行っていたからです。先週こっちにもどってきました」
「では、橋元理子さんのことはよくご存じでしたか」

「ええ。事件のことはショックでした。理子ちゃんには世話になっていたのです」
「どういったことですか」

「金を借りていました。情けない話ですが」
三谷は太い眉をしょんぼりと垂れ下げた。

「別れたカミさんが借金をつくってしまったって、取り立てがこっちにまで押しかけるようになっていたんです。私の知ったことではなかったんですが、カミさんのところには娘を二人置いてきている。やつらが学校にまでいやがらせをしていると知って放っておけなくなりました、月々の返済を肩代わりしていたら、こっちの首までまわらなくなってしまいましたね。ママに相談しても相手にしてくれないし。困り果てているところへ、理子ちゃんが救いの手をさしのべてくれたのです。残った借金、全額きれいにしてくれました」

「金額は？」
「三百万円です」

「ずいぶんな額ですね」清水はおどろいて三谷の顔を見なおした。「橋元さんとは特別、親しくされていたわけですか」

「いいえ。仲はいい方でしたが、それだけです。べつに私の方から助けてくれと頼んだわけじゃないんですよ。ある日、取り立ての連中が開店前におしかけてきました、そこを理子ちゃんに見られてしまったんです。事情を知った理子ちゃんは、その足で銀行へ行って自分のお金を下ろしてきて、札束を突きつけながら、もうこの人にもこの人の家族にも迷惑をかけるなど、連中に言ってくれたんです」

「それはまた、キップのいい話ですね。そういえばこちらのママも、橋元さんのことを姉御肌と言っていましたか」

「ママはよく、理子ちゃんのことをそう言っていました。でも私に言わせれば、少し違い

ましたね」

「では、あなたの印象は？」

「うまく言えませんが、真面目で、心の強い人でした。借金取りを追い返してくれたときも、べつに啖呵を切るわけでもなく、静かに淡々と、それでいて一步も引かないという感じがあって、連中もその雰囲気飲まれていたくらいです」

「ではなぜ橋元さんは、あなたにそこまでのことをしてくれたのでしょうか」

「腹がたったのでしょうか。連中に対してもそうですが、情けない私に対して」

そう言って、三谷は力なく笑った。

「彼女はそんなことは口にしませんでしたがね。ただ一言、子供さんをかわいそうな目には遭わせないであげてください、と言われました。言葉が少ないだけ、こっちはかえっていたたまれないような、身の置き所がない心境でした」

「そういえば橋元さん自身、親の残した借金でずいぶん辛い経験をされています。そのこととはご存じでしたか」

「知っています。でも、それだけじゃないでしょう。……私は時々、怖いと思うことがあります」

「橋元さんを、ですか」

「いや、怖いというのは言い過ぎですが、近寄りがたいというのかな。曲がったことが嫌いで、誰にでも親切だし、困っている人を黙ってみていられない、そういう意味ではたしかに姉御肌だったのかもしれないが、それだけじゃない。なにか心の奥底に、人にはうかがい知れない何かを抱えているような、そんな子でした」

「それではあなたは、三百万の金をどうされたのですか」

「もちろん少しずつ返していました。理子ちゃんには気にしないでいいと言ってくれていましたが、そういうわけにはいきませんから。はじめのうちは、なかなか金を受け取ってくれませんでしたかね。このことを知ったママが理子ちゃんを叱って、そんなに他人を甘やかしてどうするんだとか、あんたは人が好すぎるとか、私に聞こえよがしにクドクド言っていましたよ」

三谷が名古屋に移ってから、月に一回は上京し、返済額をわたしていたという。理子が店を休んでいた時は、彼女のマンションまでたずねて行って金をわたしたこともあったらしい。

「やつと半分、返し終わったところだったんです。それが、あんなことになってしまった。私は今でも心の整理がつきません。どうしてあんなにいい子が、あんなにひどい目にあわなきゃならないんですかね」

そう言って、三谷は赤い目をこすった。さえない風体や口ぶりの通り、素朴で実直な男のようだった。

ママの素子より橋元理子に心をよせている様子も感じ取れる。この男からなら、今まで聞くことのできなかつた話も聞き出せるかもしれない。

「橋元さんの交友関係、もつといえれば男性関係について、ご存じのことはありますか。彼女には、事件現場となったマンションを購入してあげるほどの、いわゆる太い客がいたと聞きましたか」

「その質問は、ママにもしましたか」

「はじめはママの素子さんから聞いた話なのですが、それも口がすべったという感じでしてね。相手の男性については、具体的なことは何も教えてもらえませんでした。他のスタッフの方も、この件についてはお答えいただけませんでした。どうやら箝口令がしかれたようです」

「でしようね。ママにとっては、あまり触れられたくない話だろうから」

「それはどういふことですか」

「相手は、桑折昭夫という男です。桑折建設の常務です」三谷は渋い顔をして言った。「横柄で偉そうな男でしてね。でも金払いはよかったから、店からは大事にされていました。そもそもこの店の開業資金も、あの男が提供したという噂です。ようするに、もともとは、ママのパトロンだった人ですよ」

「……つまりそれは、橋元さんが、ママから奪ったということですか」

「とんでもない。その逆です。ママが桑折さんと橋元さんをくっつけたんです。といて、ママが桑折さんに愛想をつかしたわけじゃありません。反対に、桑折さんの気持ちはママからだんだん離れていった。それを感じ取ったママが、大事なスポンサーを手放さないために、自分のかわりに理子さんをあてがったんです。この世界じゃ、聞かない話じゃありません」

「しかし、当の橋元さんは承知したのですか」

「なに、理子ちゃんとっても損になる話じゃない。彼女だって、そういうプロらしい割り切りは持っていましたよ。桑折さんもケロリと理子ちゃんに乗り換えて、その後も見せの売り上げには貢献しつつづけてくれたわけですが、三年くらいして、理子ちゃんのほうから別れ話を切り出した。桑折さんというのは、自分のことは棚にあげておきながら、女の子には嫉妬深い性格でね。理子ちゃんはこの店では人気がありましたから、営業時間中はあっちこっちのテーブルを渡り歩く。そうすると、桑折さんが怒りはじめるわけですよ。はじめのうちは理子ちゃんも上手にあしらっていたんですが、たぶん、仕事の外でもいろいろ面倒くさいことを言う人だったんでしよう。最後は理子ちゃんも嫌気が差して、関係を解消しようとした。別れ話を切り出された桑折さんは逆上して、理子ちゃんに暴力をふるったそうです」

「それはいつ頃の話ですか」

「あの事件が起こる、半年くらい前です」

「ちょうどその頃、橋元さんは腕を骨折していたと思うのですが」

「そうそう。その時の怪我です。ですが、あの男がふるった暴力はそれだけじゃない」

「と、いいますと？」

「それは……」三谷はわずかに言いよどんだが、思いなおしてきっぱりと言った。「あの男は、理子ちゃんを無理やり犯したんです」

「無理やり、というと？」

「だから強姦ですよ。理子ちゃんはレイプされたんです。あのマンションで。ところがひどい話で、理子ちゃんがこのことを警察に訴えても、まったく取り合ってもらえなかったそうですよ。ただの痴話げんかだろうと。夜の仕事をしている女が、ずっと内縁関係にあった、しかも高級マンションまで買ってもらった相手から、強姦されたなんて言い分は通らない。説得力がない、とまで言われたそうです。警察がですよ。こいつはいったい、ど

ういうことなんですかね」

三谷は憤然として、この時ばかりは清水に険しい目をみせた。清水は一言もなかった。「それから、どうになりましたか」

「どうもこうも、理子ちゃんが警察に駆け込んだことを知ったあの男は、逆に苦情をママに持ち込むありさまでしたよ。ママも平身低頭に謝って、理子ちゃんにも謝罪するように言い含めようとしていましたが、理子ちゃんは折れない。ごたごたもめているあいだに、騒動があいつの奥さんの知るところとなって、うやむやのまま沙汰済みになりました。それ以来、やつは店には現れなくなりましたから、ママはすっかり機嫌を悪くして、なにかといえば理子ちゃんに当たる始末でね」

「すると、二人の関係は、かならずしも円満というわけではなかったのですね」

「理子ちゃんも、時にはママに甘えたり、可愛げのあるところを見せればよかったですよ。ところが、そういう子ではありませんでしたから」

そこへ、三谷あてに電話が一本かかってきた。ママの素子から、警察の連中はまだいるか、という確認の電話だった。清水たちがいるあいだは、帰って来ないつもりらしい。

清水は礼を言って、店をあとにした。三谷は入口の階段まで送ってくれた。

去り際に、清水はふと思いついて思いついて、たずねてみた。

「ところで、あなたはゴルフをなさいますか」

「ええ。ひところは道楽にまわす金なんてありませんでしたが、最近はおぼろぼろ。……それが何か？」

清水は祥子をふりかえり、促すように顎をしゃくった。

「これは事件とは関係のないことなのですが、あなたが橋元さんのマンションを訪ねた時に、部屋に飾ってあるトロフィーをごらんになりましたか」

「ええ、見せてもらいましたよ。二人で話すときは、いつもゴルフ談義になるものでね。

彼女はたいしたものでしたよ。学生時代にプロを目指していたことは聞いていましたが、あそこまで優秀な選手だったとはね」

「そのトロフィーなのですが、小学生から大学生にかけて毎年のように何かのゴルフ大会で賞をとっているところ、中学三年生から高校一年生にかけての一時期だけ、空白期間があるようなのです。お気づきでしたか？」

「ええ、もちろん」

三谷はあっさりうなずいた。むしろ、清水がなぜそんな聞き方をするのか不思議だといった様子だった。

「反抗期だと、理子ちゃんは笑っていました。お父さんに教えられてはじめたゴルフでしたが、さすがに思春期の一時期、父親の言うとおりに行動することが嫌になって、反発をしたんだそうです。それでも、かわりにはじめた水泳で連続優勝ですから、もともと運動神経が抜群だったんですね」

祥子ははっと息を飲み、清水を見た。

「すると橋元さんは、ゴルフをやめている期間、水泳をしていたんですか」

清水がたずねると、三谷はますます怪訝そうな顔をした。

「そうですよ。中三と高一で県大会を二連覇したそうです。ちゃんとそっちのトロフィーだって、飾ってあったでしょう。あなた方、見なかったんですか」

元副支店長の証言

津田美和子が務めていた信用金庫には、副支店長というポストがあった。今は空席だが、以前は遠藤という女性がその職にあった。

遠藤は事件の数ヶ月前に退職していた。清水は何度か接触をこころみだが、海外に住んでいる娘夫婦のもとを長期訪問中ということで、これまで面談がかわななかった。

鈴木祥子をともない、これが最後というつもりで信用金庫を訪ねていくと、ちょうど帰国した遠藤が、職員たちに土産を配っているところだった。清水はこのあと、場所を変えて話を聞く約束をとりつけた。

遠藤は快くひきうけてくれた。ただ、遠藤と挨拶をかわしている間、他の職員たちが妙にそわそわしていることに、清水は気がついた。しきりに目配せをかわし、落ち着かぬ様子でこちらをうかがっている。

遠藤は大きな顔に厚化粧を塗った、深刺とした女性だった。この時間、信用金庫の周辺で営業している店といえ、ちいさな食堂しかなかった。やむをえず隅のテーブルにすわったが、周囲には数人の客がいた。話のあいだ、清水は何度も遠藤に、声の大きさをおさえてくれるように頼まねばならなかった。

清水は冒頭、職員たちの様子についてたずねてみた。

「我々があなたから話をうかがうと、なにか彼らに不都合があるのでしょいか。そんな印象をうけたのですが」

「私が何でもしゃべってしまうと思ってるんでしょう。もう職員じゃないし、あそこの人たちに気がねをする理由もありません」

「つまり、彼らには秘密があるの？」

「そんなおおげさなことではありません。ミッチャーン……亡くなった津田美和子さんのことです」

「津田さんのことで、何か私たちの耳に入れたくないことがある、ということですか」

「あの人たちは、ミッチャーンのことをどんなふうに言っていましたか」

「真面目で、頼りになる職員だと。みんなから信頼されてていたと」

「まあ、なんて白々しい」

清水が言い切らぬうちに、遠藤は目尻にしわをよせて、ほろほろと笑った。

「では、どのように思っていたのですか」

「みんなミッチャーンのことを馬鹿にして、疎んじていましたよ。あなたも、そうお感じになりませんでしたか」

「そうですね。じつは私も、そんなふうに感じていました」

清水はうなずいた。もし本当に彼らが美和子を慕っていたのなら、故人のデスクを早々に物置になど、できるはずはない。美和子が職場の中での面倒な作業を押しつけられていたことも、最初の訪問時に察しがついていた。

このあたりの真実を、あけっぴろげな性格の遠藤がすべて暴露してしまうのではないか、彼らはそれを不安に思ったのだろう。

「しかし、なぜですか。津田さんが何か、同僚から嫌われるようなことをしたのですか」

「いいえ」

「では、なぜ」

「想像が付きませんか」

「ええ」

「本当に？」遠藤は疑うような流し目を清水に向けた。「それはミツちゃんがブスで、愚図で、陰気な子だったからですよ。どれかひとつだけなら救いはあったんですけど、三拍子そろっていてはね」

あまりにズケズケした言いように、清水はさすがに眉をひそめた。

「ずいぶんハッキリおっしゃいますね」

「ひどいと思います？ でも事実です。言葉を包んだところで、本人には何の慰めにもなりません。私も、あの子がきれいだと思ったことはいちどもありませんよ。あなたたちだって、そう思いませんでしたか」

「つまり、それが、彼女が職場で嫌われていた理由ということですか」

「嫌われていたわけじゃありませんよ」

「しかし、疎まれてはいた」

「お昼ご飯は、いつもひとりでした。休憩時間にだれかと話しているところも、見たことはありません。若い人たちなんかは、遠くからミツちゃんを指さして、何か冗談を言いながらくすくす笑ったりしていました。あの子はじっと我慢していましたけどね」

「あなたは、津田さんの相談相手になってあげていたわけですか」

「私は若い人の教育係でしたので。彼女は自分から悩みをうちあけるような性格ではありませんでしたけど、でも独りで抱え込んでうじうじ悩んでいることは、端からみてもよくわかったので、まあ時々、発破をかけたりはしてました」

「どのように？」

「容姿の悪さは自分で受け入れなさいと言いました。顔は変えられないけど、性格なら変えられるでしょう。だからとにかく、いつもニコニコしていなさいと。何を言われても笑顔でいなさいと」

「わかりません」清水の横でだまっていた祥子が、我慢しきれずに言った。「なぜ自分を馬鹿にする人たちに、笑顔でいなさいといけないんですか」

、遠藤は、あしらうような笑みを祥子に向けた。

「私だって、べつに見映えのいいほうじゃありません。彼女の辛さはわかっていたつもりです。でも私は、同僚とはうまくやっていました。同じ事を、あの子にもアドバイスしただけです。そりゃあ若い人たちもひどいと思いますけど、どっちが悪いとか、思いやりがないとか、そんなことを言っているも埒があきません。ブスツとしている、愛嬌がない、そういうことで印象を悪くしているのなら、ニコニコ笑っているよりしようがないじゃないですか」

「それではまるで、津田さんの努力が足りなかったせい、というように聞こえます」

「ミツちゃんも、努力はしていましたよ。すくなくとも、そういう時期はありました。彼女の私服はいつも地味で、そのことを他の女の子たちが揶揄していたので、もうちょっと若者らしい服装をしたらどうなの、と注意したことがあるんです。それから少しずつ外見に気を配るようになって、お化粧なんかも変わってきたので、私もよかったと思っています。のですが、その年の団体旅行の日に、彼女、とても派手なワンピースを着てきたんです。

それがまったく似合っていないなくて、ミツちゃんがバスに乗ってきたとたん、バス中のみんなが声をあげて笑いました。そこで彼女も自分で笑い飛ばすなり、冗談で返すなり、そういうことができればよかったです。下を向いて黙りこんでいるものだから、バスの中の雰囲気もなんだが気まずいものになってしまつて……。移動中、ミツちゃんの方を見ると、窓の外を見ながら泣いていたようです。あの子が泣いているところを見たのは、それが最初で最後でした。それからはまだ、服装も元のさえない感じにもどつてしまいました。「その旅行というのはひよつとして、休憩室に飾つてあつた、あの写真の時の旅行ですか」「そうです」

「なんでそんな写真を飾っているんですか」

「飾つたのは支店長です。全体としては、楽しい旅行でしたから。……支店長とは、もうお話になりましたか？」

「ええ」

はじめて訪れた時には不在だった支店長と、清水はその後、二回面談している。頭のはげ上がった、せせこましい感じの男だった。

「ミツちゃんのこと、なんと言っていましたか」

「惜しい子を亡くしたと嘆いていました。しかし、若い職員たちの話では、津田さんは支店長から嫌われていたとか」

「気の短い人ですからね。ミツちゃんは何か言われるといったん考え込んでしまう癖があつたので、反応がすこし遅れるんです。そのたびに叱られていました」

「面倒な仕事を津田さんにおしつけるようなことも、あつたのでしょうか」

「それは見方によります。グループやチームで動くよりは、ひとりですべてやる仕事に向いていましたし、ミツちゃんもその方が気が楽だったはずですよ」

「お話を聞いていると、どうやら津田さんは、職場の中に自分の居場所というものになかつたようですね。彼女のプライベートについて、ご存じのことはありますか」

「いいえ」

「お友達の話を聞いたことがありますか」

「親しいお友達はいなかつたはずですよ。自分でそう言っていました」

「たしかに、津田さんの携帯電話の電話帳には、個人の番号はほとんど登録されておりませんでした。ゆいいつ登録されていたのが、あなたの番号でした」

「そうでしょう。だから私が呼び出さたんですよ」

「呼び出された、と言いますと？」

遠藤は、すぐには答えず、失礼しますよと言ってバッグから煙草を取り出して火を付けた。

「これは、事件とは関係のないことなんですけど」

「それはこちらで判断させていただきます」

「わかりました。でも、他の人たちには黙っていてください。……ある日曜日の夜、知らない番号から電話がかかってきました。私が出ると、相手は東京の病院でした。津田美和子さんという女性が入院していて、ご家族がいなくてということなのでそちらに電話しました、とのことでした。どういふことかとたずねると、ミツちゃんが橋から落ちて、海に落ちたのだそうです。近くにいた釣り船に救助されて、意識がないので病院に送り届けて

くれたということでした。さいわい大事にはいたらず、次の日に私が病院までいって退院させてきたのですが、その時、看護師さんが釣り船の船長さんから聞いたという話を、私に教えてくれました。その方はちょうど、ミツちゃんが橋から落ちる瞬間を見ていたそうなんですけど、どうも自分には、ミツちゃんが自分で橋から飛び降りたように見えた、と」

「つまり、津田さんは自殺を図ったということですか」

「わかりません。遺書なんかなかったし、靴も履いていたし。船長さんもはっきりそう断言はできないということ、警察には通報しなかったそうなんです」

「津田さんに、そのことをたしかめましたか」

「はい。本人は、否定していました。なんだかはっきりしないもの言い方でしたけど、それはいつものことでしたので」

「あなたご自身は、どう思われましたか」

「本人がちがうと言うのですから、それを信じました」

「それはいつ頃の話ですか」

「去年の秋です。十月のはじめくらい」

「そのことは、支店長や他の職員の方には？」

「支店長には報告しました。でも、あんまり関心はなさそうでしたけど。他の職員には私は話していませんし、さすがに支店長も話していないと思います」

「そうした騒ぎは、その一度きりでしたか」

「私の知る限りでは」

「彼女が自殺を図ったとすれば、原因は何でしょう」

「わかりません」

「想像くらいは、つくのではありませんか」

切り込むようにたずねられると、遠藤はさすがに神妙な顔つきになって、

「そりゃたしかに、ミツちゃんにとっては幸せとは言えない毎日だったかもしれませんが、そんなことで自分の命を絶つなんて、私には考えられません。悩みなんて、誰にだってあります。それだって、楽しくやっていると、私には考えられません。悩みなんて、誰にだってあります。そこがわかってもらえませんでした。ようは気の持ちようなんです」

遠藤は鼻の穴をひろげて、きっぱりと言いつつ切った。

「事件に遭った日、津田さんは東京へ何をしに行ったと思われるか」

「見当もつきません」

「海に落ちた日以外にも、彼女は時々、東京に出かけているようでしたか」

「さあ。でも、それはないような気がします。あのミツちゃんが休みの日に繁華街へ繰り出すなんて、ちょっと想像できませんから」

そう言っ、遠藤はけらけらと笑って見せた。

清水が質問をしている間、祥子はずっと不機嫌な顔をして、遠藤の顔を見すえていた。

「おい、何か付け加えることはあるか」

言っ、やりたいことがあるなら言っ、やれと、けしかけているようでもあった。

祥子は頬を紅潮させ、懸命に頭の中で言葉を探し求めた。しかし、悪びれもせず煙草をふかしている遠藤の顔を見ているうちに、その気が失せてしまった。

掛井真理の遺族への訪問は、一度しか実現していなかった。

清水からは、何度か再訪を申し入れた。しかし妹の仁美とその夫から、門前払いに拒絶された。清水としても、なにか具体的に確認したいことがあるわけではなかったので、無理強いはできなかった。

真理の父親とは、一度だけ電話で話すことができた。彼の真理に対する態度は、妹の仁美よりも強硬できびしいものだった。清水への受け答えも冷淡かつ皮肉で、時に怒声を発した。

「とつくに勘当しており、もはや私の娘でもない。あの子に何が起ころうとも、私には関係がない」

そう繰り返すばかりで、捜査の手がかりになるようなことは何も聞き出せなかった。

やがて、捜査の打ち切りが正式に決定された。その当日、清水はひとりの女性の訪問を受けた。

掛井敏江と、その女性は名乗った。掛井真理の母親であるという。

敏江はつきそいもなく、ひとりだった。小柄な体にえび茶色の着物をまとい、白髪をきれいに結び上げ、いかにも上流家庭の婦人といった気品はあったが、顔色が悪く、すこし動いても息切れがするようであった。自分のつま先を見つめるようにしてトボトボと歩く姿は、六十五才という年齢よりもはるかに老人に見えた。

清水は抱きかかえるようにして、静かに話の聞ける場所へ案内した。

敏江は、清水が山梨の邸宅を訪れた際、応対できなかったことを詫びた。体調が悪く伏せていたことは事実であったが、清水の前に現れなかったのは、娘の仁美から禁じられていたからだという。

「ここへ来たことがわかれば、また叱られてしまうでしょう。それでも、うかがわずにはおれませんでした」

敏江は娘の死について、新聞で報道されている以外のことは何も知らないのだという。いったいどんな状況で娘が死んだのか。なぜ、あのような死に方をしなければならなかったのか。それがわからなければ死んでも死にきれぬと思ひ、病を押してやってきた、というのであった。

清水は丁寧に応接室へ案内し、事件の詳細を話して聞かせた。ためらいはしたものの、敏江から乞われるままに、真理が殺害される瞬間の動画も見せた。敏江はまじろぎひとつせず画面を見つめていたが、映像が終わると卒倒寸前になり、ソファに手をつけて体をささえた。隣にすわっていた祥子があわてて、コップのお茶を敏江の口もとに運んだ。

敏江が気分を落ち着けるまで、清水は待ちつづけた。

しばらくたって、敏江は思いつめた表情で、姿勢を正してすわりなおした。自分に何でも質問してほしい。どれだけ役にたてるかわからないが、せめて捜査に協力したいのだと、敏江は目に涙をためてそう言った。

捜査の打ち切りは、明日公表される予定であった。敏江はもちろん、そのことを知らなれることも、刑罰を与えられることもない。

しかし清水は、そのことを黙っていた。打ち明けるには忍びなかった。

「率直に申し上げて、真理さんがなぜ命を落とすことになったのか、その理由がまったくわかっていません。容疑者である速水という男とのつながりも、同時に亡くなった被害者二人との関係も、何もわからないのです」

この点については敏江も、新聞や週刊誌の報道を見て、真理の遺品を調べたのだという。卒業アルバムや古い郵便物、仕事関係の書類など、つぶさに調べたが、三人の名前は見つからなかった。

「真理さんにご実家にもどったあとも、頻繁に東京に来ていたそうですが、その目的を存じですか」

「いいえ。……でも、東京に行くというよりは、あの家にいたくなかったということが、本当の理由だったと思います」

「なるほど。真理さんにとっては、あまり居心地のいい場所ではなかったようですね」

「はい」敏江は、膝の上で握りしめたハンカチに目を落とした。「真理がもどってきてからというものは、同じ敷地に住んでいるというのに、夫も、妹夫婦も、まったく言葉をかわそうともしませんでしたから」

「それはやはり、結婚詐欺の件をきっかけにして？」

「いえ、大学卒業後は家にもどってくるという約束を、真理が守らなかったことが、そもその原因です。それまで夫などは、むしろ傍目からかどうかと思うほど、真理のことを甘やかしておりました。真理は四十を超えた夫がはじめて授かった子供でしたから、それこそ目の中に入れても痛くないほどの溺愛ぶりです。当時は掛井の義父……真理の祖父がまだ健在で、男子を産めなかったことで私などは責められましたのですが、夫は次に男の子を産んでくれれば良いからと言って、家にいる時は片時も真理をそばから離そうとしなかったほどです」

「では真理さんの方は、お父様のことをどのように思っていたのでしょうか」

「思春期をすぎて自分でものを考えるようになってからは、父親に対してというより、父権的で厳格な掛井の家柄に対して、反発心を持つようになってきました。自由になりたい、他人に自分の人生を決められるのはいやだと、私にはよく申しました。大学を卒業したあとも、はじめのうちは約束をやぶって申し訳ないという気持ちを持っていたと思います。それが変わったのは、ひどい手段で無理やり仕事を辞めさせられたことが原因です」

「無理やり、といますと？」

「真理の最初の勤め先は、ちいさな出版社でした。お給料はあまりよくなかったようですが、真理は旅行雑誌の仕事に生きがいを感じているようでした。夫は会社を辞めて帰ってくるように説得し続けておりましたが、どうしても真理が聞き分けないので、とうとう出版社に直接手を回して、辞めさせてしまったのです。どうやら経営者の方々に、とうとう額のお金をわたしたようです。真理がその経緯を知ったのは、経営難を口実に解雇された、しばらくたってからでした。それ以来、あの子は自分から家に連絡してこなくなりました。親子の関係がこじれてしまったのは、ここからです。もともとの原因を作ったのは、夫の方なのです」

敏江は時々、苦しそうに胸に手をあてた。息が切れるのをこらえ、一心に言葉を絞らだしているかのようにだった。

「真理はその後、転職を繰り返しましたがうまく行かず、それでも意固地になって東京での生活を続けておりました。いらだった夫は、とうとう本人に無断で結婚話を進めてしまい、それに反発した真理は、自分の意思による結婚にこだわって、焦ってしまったのです。そこを、悪い男の人につけこまれてしまったのです」

「その点は、仁美さんからうかがっていただけの事情と、やや食い違っているようですね」
寛一氏が強引に縁談を進めた理由について、仁美は真理の側に原因があるという説明をしていた。真理が東京の生活への未練から、思わせぶりに先のばしにして時間をかせいでいたのだと。

しかし、敏江はきっぱりと否定した。

「いいえ。真理ははじめから、夫の秘書と結婚することは拒み続けておりました。夫が取り合わなかっただけなのです。仁美がそのように申したのは、仁美自身が父と同じように、姉が秘書と結婚して家を継いでくれることを願っていたからです。あの子は、自分が姉の身代わりにされたと、今でもそう思っているんです」

「それが、姉妹の不仲の理由ですか」

「子供のころはとも中のいい姉妹でした。あの二人は、じつはよく似ているんです。仁美も本当は、真理と同じ願望をもっている娘です。父親子のことも、掛井の家も、心の底では嫌っているのが私にはわかります。ただ、姉ほどの行動力がないために、結局は父親のいいなりになってしまうのです。そのことで姉のことを逆恨みして……。真理もそのことがわかっていいるから、なおさら家に帰りたくなかったのだと思います。ところが詐欺の一件の直後、夫は真理の住んでいたマンションを勝手に解約してしまっただけです。急に追い出されても、行く場所なんてありません。管理会社と交渉して、引越越し先が決まるまで、期限付きで住まわせてもらえらることになったのですが、そもそも引越しをするための費用もありませんし、仕事もなかなか見つけれられないこともあって、気持ちとしてはずてぶん追い詰められていたと思います。そのうちなかなか連絡もつかなくなってしまうって、私も心配しておりましたところ、昨年十月に突然、東京の病院から私に電話がかかってまいりました」

「病院から……やはり真理さんは、どこか体を壊されていたのですか」

「いいえ。知らせは、真理が流産をしたというものでした」

「流産ですって……?」

予想外の答に、清水は啞然として言葉を失った。

敏江は、それが我が身に起きたことのように、苦痛に顔をゆがめた。

「救急車で運ばれてきたのだそうです。妊娠のごく早期で、真理の体に大事はなかったのですが、本人にお金がないので、かわりに治療費を払ってほしいという連絡でした。この時の真理は、アルバイトをかけたもちとしてどうにか生計をたてている状態だったようです。私はすぐに口実をつくって上京し、真理を退院させました」

「子供の父親が誰か、真理さんはお話しになりましたか」

「アルバイト先で知り合ったそうです。横浜にお住まいの会社員だそうで、すでに家庭のある方でした。真理自身、はじめから先のある関係だとは思っていなかったらしく、もう別れ話もすんでいるということ、退院後もその方と連絡をとろうとはしませんでした」

「真理さんは、一人で子供を育てていくおつもりだったのでしょうか」

「流産するまで妊娠していることに気づかなかった、と本人は申しましたが、本当のところはわかりません。真理は、心も体も衰弱しきっているようでした。私は家にもどってくるよう、泣きながら説き伏せました。最後はあの子もうなずいてくれました。もう意地も張り通せないほど、疲れはてていたのです。さいわい離れが空いておりましたので、そちらに寝起きをさせ、夫や仁美とは顔をあわせずにすませることができました」

「それが、事件の半年前ですね」

「はい」

「具体的に、何月のことですか」

「今年の十月です」

「それ以降、真理さんはどのように過ごされていたのですか」

「毎日、ぼんやりしておりました。口数も少なくなつて、何を考えているのかわからず、私もそつと見守っているしかありませんでした。食事もほとんど喉を通らない様子で、もう病人のように痩せ細つてしまつて……」

「なるほど、そういうわけでしたか」

「夫は村人たちの手前、真理がいつまでも独り身でいることを、体裁が悪いと感じていました。詐欺の一件は夫にとつて、掛井家の汚点だったので。村人の記憶からそのことを消すために、とにかく真理を結婚させてしまいたいと、やっきになっていました。相手など誰でもよいと、いろいろな方面に手をまわして縁談を画策しておりましたが、真理はかたくなに話を聞こうとしませんでしたので、夫もついにあきらめて、お前は勘当する、もう親でも子でもないから、一日も早く出て行けと……」

「この流産のことは、ご主人や仁美さんには、お話にならなかつたのですね」

「もちろん、話しておりません」

帰郷後、真理は時おり東京に出かけていた。向こうへ止まってくることもあつた。それで気晴しになるのならと、敏江もわたせるかぎりの金を小遣いとして与えていたという。

「それがいけなかつたのでしょうか……」

敏江はそれまで伏せていた顔をあげ、答を求めるように清水と祥子を見くらべた。

事件前日、真理は何も言わずに出て行つた。敏江は体調をくずして母屋で伏せており、ニュースを見てはじめて、真理が東京へ行つていたことを知つたという。

「あの子の身に何が起こつたのか、それがわからなければ、私は死んでもしにきれません。あまりにも不憫です。いったいあの子に、どんな罪があつたというのですか」

あえぐような息づかいで最後まで言い切ると、敏江は皺だらけの両手で顔をおおい、激しく肩をふるわせた。

「かえつてお気の毒だったのでありませんか。詳しく話したりして」

敏江を通りまで見送り、タクシーに乗せたあと、祥子が清水に言った。捜査が打ち切りになることを、清水はついに、敏江に告げることができなかつたのだ。

遠ざかるタクシーを、清水はいつまでも見つめていた、

「しかたがない」遠ざかるタクシーを見つめながら、ぼつりと言つた。「話をしてみよう、あの人に。……まずは居場所を探さなければならぬが」

清水の長い話に、今井は黙って耳をかたむけていた。その間あいづちもうたず、うなずきもしなかった。

清水は、ほとんどひと息にしゃべりまくった。そしてすべてを話し終えると、今度は清水が黙り込んだ。

我慢くらべのような沈黙が、しばらく続いた。今井のするどい視線は、清水の顔をつきぬけて、もっと遠くを見つめているようだった。一方の清水は、医師の診断を待つ患者のような表情で、今井を見つめていた。

やがて、今井の目の焦点が、清水のうえにもどってきた。

「もういちど聞きますが、部屋には本当に四人しかいなかったのですね」

「ましがありません」

「それでも、速見は潔白だというのですか？」

「僕はそう考えています。ただのカン、と言われればそれまでですがね」

「私は、カンというものを否定したことはありません」

「知っています。ただあなたは、僕のカンを信じてくれたことは一度もなかったのです」

「あの時の君は、まだ新人でした。今は違うでしょう。……見たところ、私より君の方が自分自身を疑っているようですが」

「そうかもしれないですね。速水個人の印象がどうあれ、起こったことを考えれば、速水が三人を殺したとしか説明のつけようがありませんから」

「そうとも言い切れません」

清水は驚いて、今井の顔を見なおした。しかし今井はその視線をかわし、清水の隣で立っている祥子の方へ目を向けた。

「鈴木さんは、どう思いますか」

その眼差しは、清水をにらんでいた目と同様、冷め切っている。

突然の名指しに祥子は戸惑っている、

「何か意見があるでしょう。黙っていてはわかりません」

と、詰め寄られた。祥子はやむなく、思いつくままに答えた。

「潔白というのは、つまり、完全に潔白という意味でしょうか」

「というところ？」

「一連の出来事にいっさい関与していないという意味か。それとも、部分的には関与したが殺人だけはしていない、という意味なのか」

「部分的な関与というのは、具体的にどのようなことですか」

「たとえば、カメラを回すだけ、とか」

「なるほど」今井はちいさくうなずいた。「では、完全に潔白だったと仮定してください。速水は薬物によって完全な酩酊状態にあって、当日の朝に起きた出来事には、まったく関与していない。そのうえで、三人の女があのように死んでいった。そんなことが現実には可能だと思いますか」

「いいえ。やはり不可能だと思います」

「それは、三人とも殺されているから？」

「もちろんそれもありますが、いくつかの点で、物理的に不可能です」

「たとえば？」

「たとえば、最初の動画です。三人の女たちはみんな手足を拘束された状態で写っていました。したがってカメラを持っていたのは、どうしたって速水ということになります」

「橋元理子はたしかに手足を拘束されました。浴室までひきずられていくところで、それが確認できます。ですが他の二人は、ソファにすわっていただけです。手首をくっつけてはいましたが、結束バンドまでは写っていませんでした。拘束されたふりをしていただけかもしれません」

「ですが、その二人を撮影した人物は、当然その二人ではありえませんが。橋本理子は拘束されていたわけですから、撮影したのはおのずと速水ということになります」

「拘束された橋元理子の姿が映るのは、カメラがいったんバルコニーに出て、もどってきたあとのこと。それまでは、まだ手足は自由だったのかもしれませんが」

「……では、カメラがバルコニーに出ている間に？」

「撮影しながら橋元理子がバルコニーへ出る。そのカメラを、たとえば津田美和子に引きわたす。掛井真理に、手首足首を結束バンドで縛ってもらい、廊下に向つ伏せに寝転がる。津田美和子がカメラを持ったまま、橋元真理の体を浴室へひきずっていく。不可能ではありません。バルコニーからもどって以降、カメラはいちども津田美和子と掛井真理を写していないのですから」

「そんな、まさか」清水が思わず口をはきんだ。「考えられません。どうして彼女たちがそんなことをするんですか」

「ここでは理由などいりません。一連の出来事が、速水抜きで遂行可能なのか、それだけを検証しているのですから。つまり、最初の動画は速水抜きでも撮影可能だということ。では鈴木さん、次に速水抜きで不可能と思われる点は？」

祥子は襟足から耳のあたりが熱くなった。試験管の前に立たされているような緊張と高揚につきあげられ、思わず一歩前に進み出て答えた。

「津田美和子の体を、バルコニーの手すりまで持ち上げることが出来たのは誰か、という点です。津田美和子の体重は六十キロ。手すりの高さは一・二メートル。摂食障害で痩せおとろえた掛井真理に、そんなことが出来たとは思えません。また、この時点で橋元理子はすでに浴室で溺死しています。たとえそうでなかったとしても、小柄な橋元理子に、やはりそれだけの力があつたとは思えません」

「速水という男も、決して屈強な体格ではなかったという話でしたが」

「それでも、橋元理子や掛井真理よりは、力があつたと思います」

「力が不足しても、道具を使えば死体を持ち上げられるのではありませんか」

「そんな道具は、現場にはありませんでした」

「簡単に決めつけないでください」今井の口調が、にわかに厳しくなった。「考えてみてください。死体を手すりに上げるには、どのような道具が必要ですか」

祥子は懸命に思考をめぐらせた。

「……重量のある物体を持ち上げるには、リフトが要ります。あるいは櫓と滑車とか。物干し台の間隔をせばめれば、竿を滑車代わりにロープで引き上げるかもしれません。それでも、死体をつり上げるロープのような物は必要になります」

しかし、今井は首をふった。「滑車を使って物をつり上げるには、その物を持ち上げるのと同じ力が要ります」

「……手すりからリビングの床まで、長い板状の物をわたしてスロープを作れば、その上を滑らせて手すりの位置まで死体を上昇させられます」

「手すりは一・二メートルでした。かりにスロープの傾斜を四十五度としても、板状の物は一・七メートル必要になります。それだけの長さで、死体を乗せても折れたり潰れたりしない、しかも血痕のついた何かが、現場には残されていなかったか」

「いいえ」

だからそう言ったのではないか、そう反論したくなる気持ちをこらえ、祥子はさらに頭を回転させた。二三〇一号室で見た物の中で、何か道具に仕えそうな物はないか……。

そして、ひとつの答にたどりついた。

「でも……」

祥子は出かかった言葉を読み込んだ。われながら、すこし荒唐無稽な気がしたのだ。

「いいから、言ってみてください」

今井にうながされ、祥子はためらいながら言った。

「洋間にチェストの中に、バランスボールがありました」

死体をバランスボールの上に乗せ、弾ませて反動をつければ、一・二メートルくらいは宙に浮かせることが出来るのではないか。

「まさか、それはないだろう」清水が言った。「いくらなんでも、それではまるで曲芸じゃないか」

「私もそう思います」今井は言った。「しかし、その曲芸を練習する時間が、彼女たちにはたっぷりありました。津田美和子がマンションをおとずれたのは、午前三時です」

「本気でおっしゃっているんですか」清水はかつての上司に目をむいた。「練習とって、いったいどんな練習をするんですか」

「両腕をバランスボールの上に乗せてそのまま転がせば、死体は簡単にボールの上に乗るでしょう。ボールの直径は何センチでしょうか。大きいものなら直径一〇〇センチ近くあります。もちろん、重量で球体は上下にひしゃげるでしょうが、何度か弾みをつければ、その勢いを借りて一・二メートルの手すりに死体を乗せることは出来ると思います。問題はボールを転がしはじめる位置や、力加減、弾ませているあいだに死体をボールから逸らさないこと、浮いた瞬間に手すりの上に移動させるタイミングなどでしょう。それらも、運動神経抜群の橋元理子なら、何回かリハーサルをすれば、案外簡単にコツをつかめるのではありませんか」

「しかし、死体は血まみれだったんですよ。バランスボールには血痕などついていませんでした」

「もちろん拭き取ったのでしよう。橋元理子のパジャマで」

祥子と清水が、同時にあつと声を上げた。

寝室にあったシルクのパジャマには、筋状の血痕がのこっていた。血痕は、津田美和子のものであった。バランスボールの空気を抜き、そこに付着した血をパジャマでぬぐい取れば、たしかにパジャマにはそのような血痕がつくであろう。筋は二本ついていたから、二回ぬぐったのだ。

「血液反応は調べたのですか」

「まさか。引出しにしまつてあつた運動用具に対して、ひとつひとつ血液検査などしませんよ」

「可能であれば、今からでもやってみるのですね。ふたつあつたボールのどちらか、たぶんに色の赤い方だと思いますが、そこから血液反応が出るか。もうひとつ、パジャマの血痕の幅が、空気を抜いたバランスボールの幅と一致するか。一致すれば、この仮説は証明されたと言つていいと思います。パジャマの血痕を説明づけるものは、他にはありませんから」

清水はネクタイの結び目をつかんで、左右に振つた。清水は潔白ではないかという、自分でも半信半疑のまま提起した仮説がみるみる論証されていくことに、かえつて戸惑い、狼狽している。

むしろ祥子の方が、冷静さを失つていなかった。

「まだ、速水抜きで説明のできないことが残っています。掛井真理の体に火を放つたのは誰か、ということですよ。その瞬間をとらえた動画の最後に、警察が室内に突入しています。つまりこの時点で、すでに橋元理子も津田美和子も死亡しています」

「たしかに、掛井真理の体に火をつけたのは、津田美和子ではありません。その時、田美和子は死体となつて、マンション下の遊歩道でおおぜいの警官にかこまれていました。ですが、橋元理子はどうですか」

「たしかに、橋元理子の溺死体が発見されたのは、時系列でいえば最後です。掛井真理の体に火をつけ、死角からカメラの後ろを通つて廊下に出て、浴槽に自分から飛び込む、ということも理論的には可能です。ですが、彼女が浴槽に落ちたのは午前七時、掛井真理が殺される二時間も前です。それは一本目の動画が証明しています」

「あなたの言うとおりで。一本目の動画に写つていたのは、橋元理子が浴槽の中に落とされる瞬間で、決して彼女が溺死をした瞬間ではありません」

「同じ事ではないでしょうか。彼女が浴槽に落ちたあと、カメラは五分以上まわり続けていました。仮に橋元理子が優秀な水泳選手だったとしても、その間、息をとめておくことは常識的に不可能です」

「それは、浴槽に張つた水の水位が、五分間そのままだった場合の話です。カメラをバスチェアの上に据える間にこっそり浴槽の栓を抜いておけば、橋元理子が水しぶきをあげて落ちたあと、どんどん水位は下がっていくでしょう。横から浴槽を写しているカメラには、その様子は写りません。浴槽はシエル型で底の部分がせまいのですから、水の容量もその分少なくなる。一分半から二分もあれば、鼻や口が露出するくらいには、水位は下がる。五分は無理でも二分なら、息を止めていることは出来たのではありませんか。優秀な水泳選手なら」

「つまり、橋元理子は自分の死亡時刻を午前七時に偽装した、ということですか」

「他の二人の力を借りれば可能です。橋元理子の額に瘤がのこつていたということですから、本当に空き瓶で殴らせはしたのでしょうかね」

「ですが、その時に橋元理子の手首は結束バンドで縛られていました。これでは浴槽から出たあとで、津田美和子の死体を手すりにあげることも、掛井真理の体に火をつけることもできません」

「もちろん、いったん結束バンドを切断したのです。リビングで発見された切断後のバンドがそれです。あれは、バルコニーから突き落とす前に津田美和子の拘束を解いたのではありません。津田美和子をはじめからいちども、手首を拘束されていなかった。じっさいは橋元理子が二回、自分の手首を結束バンドで縛ったのです」

「いや、さすがに、ちょっと待ってください」

清水は両手をあげて、勝手に話を進めている二人を制した。可能性を追求するだけの仮説だったはずが、なにやら真相究明の様相を帯びて白熱しはじめている。

「これは行き過ぎです。これでは三人の女たちが計画的に互いを殺し合い、その罪を速水に着せようと図った、ということになってしまふ。いくらなんでも、そんな話は信じられない」

「これは君が言いはじめたことです。速水が事件と無関係とすれば、それ以外の真相はありえないでしょう。もっとも、殺し合いと言うよりは、相互の自殺幫助というべきでしょうが」

「飛躍のしすぎです。彼らは古くからの友人でもなんでもない。生前に関係があったかどうかとも疑わしい四人なのに」

「古い友人でなくとも、似通った境遇がお互いの距離を短時間で縮めてしまふ、ということとはあり得ると思います。それに速水はともかく、三人の女をむすびつける接点は、ひとつだけあります」

「何ですか、それは」

「昨年十月、海の近くの病院です。橋元理子が強姦されたのが、事件の半年前。つまり去年の十月です。腕を骨折しているのですから、病院へはかならず行っているはずです。そして彼女のタワーマンションは、海のそばに建っています。掛井真理が流産で入院したのも事件の半年前。掛井真理の住まいも、海の見える丘の上にありました。津田美和子が自殺を図ったのも事件の半年前。彼女は橋から海に飛び込んで、病院に運ばれています。三人が治療を受けた病院は、特定ができていますか？」

「いいえ」

清水は顔を紅潮させて首を振った。強姦と、流産と、自殺未遂。この三つの情報は、いづれも捜査打ち切りの内示のあと、清水の未練から蛇足のようにしておこなった聞き込みによって入手したものである。もう一步踏み込んで裏をとるのまでには至っていない。そちらにかける時間を、清水は今井の捜索に費やしていたともいえる。

「ここから先も、やはり仮説です。三人は同じ病院で治療をうけ、そこで顔をあわせ、言葉をお互いに交わした。心の傷が極限までたっしていた状態の三人は、そこで連帯し、意気投合をし、共通の目的を持つにいった」

「……つまり今井さんは、この事件は集団自殺だとおっしゃるんですか」

清水の目が限界まで見開いた。小鼻がふくれあがり、声が喉にひっかかった。

「驚くにはおよびません。速水が潔白という前提をたてるなら、必然的に落ち着く先はこんなところですよ。ただし、ふつうの自殺とはすこし趣を異にしています。掛井真理は死に臨み、わざわざウエディングドレスを選びました。津田美和子も、同僚の嘲笑をかった黄色いワンピースを、あえて選んでいます。そして、死ぬ前に頬の肉を口角から耳へと切り上げています。うまく笑うことができずに責められたことに対する、これが彼女の答だった

のではないでしようか。これらの死に方自体が、彼女たちの強烈な意思の表明であるように、私には感じられます。悲嘆にくれてただ死んでしまったという、単純な話ではないでしよう」

「それでは橋元理子はどうなるんです。なぜ彼女は、水着を着ていたのですか。そもそも他の二人にくらべて、彼女に自殺をする動機がありますか」

「それは想像するしかありません。でも、きっとあったのでしょうか。怒りが自殺の動機になるのなら」

「……怒りですって？」

「ボーイの証言、副支店長の証言、母親の証言、これらを聞かせてくれている時に、君の表情に浮かんでいた感情のことです」

今井は椅子の背もたれによりかかり、組んだ両手を腹のうえに置いた。

「全体の計画を主導したのは、おそらく橋元理子でしよう。そして半年の間、津田美和子と掛井真理が上京したおりに、綿密におこなった。まず罪を着せる生贄の男を選び出し、橋元理子とその男が通うバーに現れ、誘惑する。体の関係を重ね、速水からすすめられた薬物を飲むふりをして、ため込んでおく。事件当夜、動画編集のやり方を教えてほしいとねだって、機材を自分のマンションに持ち込ませる。そこで、ためこんでおいた薬物を速水に飲ませ、前後不覚の状態に陥らせる。津田美和子と掛井真理が、未明にマンションにやって来る。そのあたりの打ち合わせは、橋元理子が速水の携帯電話を使って、二人と連絡をとっていたのでしよう」

今井は薄く目を閉じ、まるで原稿を読み上げるように、淡々と言葉をつむいでいく。

「朝を待ち、橋元理子は水着に、掛井真理はウエディングドレスに着替える。午前七時を待って、一本目の動画を撮影する。ソファの上の津田美和子と掛井真理を撮影し、カメラがバルコニーに出た間に、パーカーに着替えた津田美和子とそのカメラを持ちかえ、橋元理子は両手足首を結束バンドで縛って廊下に伏せる。津田美和子が撮影をしながら橋元理子を浴室まで引きずっていき、浴槽を満たした水面を写したあとでカメラをチェアに置き、その間に栓を抜いておく。そして橋元理子を立たせ、空き瓶で頭をなぐる。五分カメラを回しっぱなしにしたあと、空になっていく浴槽から橋元理子を助け起こし、ニッパを使ってバンドを切断する。そして撮影した動画を、速水のパソコンを使ってアップロードする」

「何のために？」

「一番最初に殺されたのが橋元理子であると強調するため。あるいは津田美和子の死体が発見されたあと、二三〇一号室にはまだ掛井真理がいるのだということを知らしめるためです。このおかげで警察は、火災報知器が鳴り出すまで踏み込むことができなかつた」

清水が腕を組み、獣のようなうめき声を上げた。

「速水のナイフを使って津田美和子の頬を裂き、体を滅多突きにしたのは、津田美和子自身のように思います。あるいはとどめをさしたのは、他の二人のうちのどちらかかもしれない。黒いパーカーを着た橋元理子がバランスボールを使って死体をバルコニーの手すりに乗せ、遊歩道へ墜落する様をカメラにおさめ、映像をアップロードする。警官が二三〇一号室を取り囲んだころあいを見計らい、速水に血まみれのパーカーを着せてリビングの床にすわらせる。浴槽をもういちど水で満たし、掛井真理の手足をバンドで縛る。テー

ブルの上に乗った掛井真理の体にガソリンをふりかけ、カメラの角度を調整してスタートさせ、腕だけを画面に写してライターで火をつける……」

「速水にパーカーを着せたのは、火をつけたあとだったのではありませんか。カメラに写った腕は、黒い袖に黒い手袋をしていました」

祥子の問い、今井は抑揚のない声で答えた。

「火をつけたあとで速水にパーカーを着せている時間はなかったでしょう。おそらく水着の上に、洗濯機の中にあつた黒いトレーナーを着ていたのだと思います。ここは警官が踏み込んでくるまでの時間との競争になります。掛井真理に火をつける。ライターを速水のポケットに入れる。手袋を彼の手にはめなおす。トレーナーを脱ぎ、洗濯機の中に放り込む。そして自分の手足を結束バンドで縛って、浴槽の中に背中から落ちる。火を付けてから火災報知器が反応するまでの時間。それを受けて指揮官が突入を決断し、その命令が伝達されるまでの時間。じっさいに警官隊が突入する時間。すべてを足し合わせれば、それだけの余裕はあつたでしょう」

「火を付けられた掛井真理が、テーブルの上から動かなかつたのは、もしかしたら……」
「本当に失神していたのかもしれませんが、そうでなければ、自分の意思で動かなかつたということになります。火災報知器との位置関係で、自分が暴れ回ってそれだけ早く報知器が反応してしまうことを防ごうとしたのかもしれませんが、何にせよ、強固な意思、もしくは意地がなければできないことです。その意地のもとになったのは、やはり怒りや恨みといった感情だと思います」

「馬鹿げている」清水はたまたま椅子から立ち上がった。「いったい何のためにそんなことを。まったく無意味じゃありませんか。ワンピースにしるウエディングドレスにしる、そんなあてつけをしたって、連中は誰も自分を責めたりはしていませんよ。あまりにも愚かな行為です」

「彼らの思いは、それぞれの心の中をのぞいてみなければ、本当のところはわかりません。平気に見えでもうわべだけのこともかもしれないし、今は平気でも、五年後十年後は良心の呵責に苛まれていくかもしれません。愚かな行為だという意見には、私も賛成です」

「橋元理子の場合は、どうなんです？ 水着を着ることが、どうして桑折という男や、自分の訴えをしりぞけた警官に対する怒りの表明になるんですか」

「橋元理子の場合は、他の二人とはもっと違ったことを考えていたように思います」
「何ですか、それは」

「三谷というボーイも言っていました。橋元理子には怖さを感じるものがあつたと。彼女は心の奥底に、人にはうかがい知れない何かを抱えている女性だったと。潔癖さや姉御肌といった、もちまへの性格を含めた、決して短絡的でない何か。その何かに、津田美和子や掛井真理の悲しみや苦しみが糾合するかたちで、このような計画が生まれたのではないでしょうか」

「いいえ、私には理解できません。言いたいことがあるなら、なぜ遺書をのこさないんですか。どうして速水がまきこまれなければならなかつたんですか」

「それはやはり、彼が警察幹部の身内だつたからでしょう。どのように速水という男を探りあてたのかはわかりませんが、橋元理子の務める『 Rond』は高級店で、各界の要人が利用しているということでした。そこでは警察の高級官僚が、不用意に愚痴をこぼしてい

たかもしれません。定職につかず遊び歩いている落ちこぼれの甥について」

「そういう意味で言ったのではありません。速水には、そんな目に遭わされる理由はないはずだ」

「それを言うなら、死んだ三人だってそうでしょう」

今井が鋭く言った。ほんの一瞬、その声音に感情的なゆらぎが生じた。

「君の言うように、橋元理子が水着を着たところで、自分を強姦した男や、訴えを無視した警察へのあてつけにはなりません。これに関しては、もっと奥の深い意図があったように思います。君も気づいているでしょうが、この事件には手がかりが多すぎます。周到な仕掛けで速水以外の犯行ではありえないように装いながら、一方ではそうではないということ露骨に、饒舌に匂わせているのです。わざわざ水着を着たり、トロフィーの中から水泳に関する物だけ廃棄したのは、かえって自分と水泳との関連に注意を向けようとしているかのようです。バランスボールの血痕も、洗い落とすことだってできたのに、あえてパジャマで拭きとっている。これらにより、浴槽で息をとめていたことや、死体を手すりまで持ち上げる方法を、示唆しているように感じませんか」

「……何がおっしゃりたいんですか」

「私たちの今までの議論は、すべて橋元理子に誘導されていたのではないか、ということ。速水以外に犯行は不可能と思わせ、一方で、それを覆す手がかりをわざと残しておく。まっとうに捜査をすれば、その手がかりをたどって速水の潔白を証明できる。しかし、一部の人間の保身目的に事件幕引きを急げば、そのこと自体が冤罪を作り出す。どちらでもあり得ましたが、結果は後者でした」

「その皮肉が」速水はどすんと椅子の上に戻を落とした。「橋元理子の、本当の目的だということですか」

「だとすれば、橋元理子は失敗したのかもしれないね。保身をはかった一部の人たちは、事態さえ沈静化すれば、速水のことなどどうでも良いと思っただけでしょうから……。橋元理子が誰を、あるいは何を相手にしていたにしろ、彼女のメッセージを受け取ってしまったのは、君ということになります」

「冗談じゃありません。どうして僕がそんな役回りを引き受けなければならないんです。五年前の報いともいうんですか」

「なるほど。これも何かのめぐりあわせですね」

清水の頬が苦悶にゆがむのを見て、今井の頬がはじめてゆるんだ。

「話をはじめにもどしましょう。ここまでの話は、一連の出来事が速水抜きでも遂行可能なのか、ということを検証しただけで、速水の潔白を証明したわけではありません。バランスボールから血液反応が出たとしても、それを使ったのは速水だったかもしれません。三人の女たち同じ病院で治療を受けていたとしても、ただの偶然という可能性はのこりません。黒い手袋を調べれば、今からでも橋元理子の汗が検出できるかもしれませんが、それも決定的な証拠にはならないでしょう。その他、いくつか細かい証拠が出てきたところで、いちど臭いものに蓋をしてしまったのですから、その蓋をふたたび開けようとは誰も思わない……」

そう言うと、今井はまっすぐな目で清水を見た。

「あとは君次第ということですか」

「さて、長くなりましたが、今のが私の意見です。これで満足ですか？」

今井は背もたれから身を起こし、机に両手をついた。

「満足したら、帰ってください。そして掛井仁美の言い草ではありませんが、もう二度と、ここへは来ないでください」

ここまでの議論を通じて、今井の頑なさがすこしでも軟化したという気配は微塵もなかった。清水はあいかわらず、招かねざる客であった。

清水は、もっと何か言いたそうにしていた。しかし今井の無表情が、それを受け付けなかった。

清水はついに言葉を発せず、椅子から立ち上がった。別れの挨拶もせず部屋を出て行く彼の足取りは、ここへやって来た時よりも、むしろ重くなっていた。

祥子が頭を下げ、あわてて彼のあとを追おうとすると、

「ちよっと」

と、今井に呼び止められた。

祥子はふりかえった。その顔を、今井はじっと見つめた。

「……なんでもありません。もうお帰りなさい」

今井はくるりと椅子を回し、祥子に背を向けた。祥子はもういちど頭を下げ、部屋を出て行った。

廊下には、清水の姿はなかった。祥子は階段を降りてビルの外に出た。

清水は自動販売機の前で、缶コーヒーを飲んでいた。広い背中が、ころなしか小さく丸まっているように見えた。

二人は肩を並べ、地下鉄の駅へ歩き出した。家路をいそぐ勤め人たちが、彼らを追い抜いていった。街路樹の枝を揺らす風は、もう秋の気配であった。

「このあと、どうされるおつもりですか」

祥子は清水にたずねてみた。

「どうもしない。ここまで来たら、どんな理由であれ、捜査の継続は認められない。いくら清水が潔白だと言っても、信用しないだろう。保身を優先するあまり、かえって冤罪を晴らす機会を、みずから放棄するわけだ。馬鹿な話だ」

「橋元理子は本当に、これを望んでいたのでしょうか」

「もう、どっちだっていいよ、そんなこと。……それよりも、じっさいに今井さんと会ってみて、どう思った？」

「驚きました。まさか女性の方だったなんて」

「……なぜだ」清水は足をとめ、びっくりするほど厳しい声で祥子に言った。この日一番、不愉快そうな表情だった。「俺は今井さんのことを、男とも女ともいわなかったはずだ。お前はそれを、どうして男だと決めつけたんだ？」

祥子は答えられなかった。

清水もそれ以上は問い詰めず、二人はまた駅に向かって歩き出した。